

○相手方ノ援用セザル證據ヲ相手方主張事實ノ認定資料ニ供シ得ルカ

列事 酒崎重三郎
列事 山崎尚

○相手方ノ援用セザル證據ヲ相手方主張事實ノ認定資料ニ供シ得ルカ

證據ハ共通ナルヲ以テ當事者一方ノ援用セザル證據ハ總令相手方ニ於テ之ヲ援用セザルトキト雖裁判所ハ相手方ノ主張事實認定ノ資料ニ供スルヲ妨ケザルコト勿論ナリ

昭和十五年(オ)第九百四十二號

宮城縣宮城郡大澤村大字上原十六番地

上告人 庄司伊三郎

右訴訟代理人 藤田士郎

宮城縣宮城郡大澤村大字上原一七番地

被告 庄司又右衛門

右當事者間ノ所有權移轉登記抹消請求事件ニ付仙臺地方裁判所カ昭和十五年六月二十八日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

【主 文】

本件上告ハ之ヲ棄却ス

【理 由】

上告理由第一點ハ原判決ハ被告上告人ノ援用セザル上告人提出ノ證據ヲ被告上告人ノ爲メニ採ツテ判斷ノ資料ニ供シタル違法

アリ即チ本件土地カ上告人ノ所有ナル事ヲ證明スル爲メニ上告人カ原告ニ提出シタル第二號證據ヲ被告上告人等ニ於テ之ヲ援用セザルコトハ前記判例事實記載ニ徴シテ明瞭ナリ然レニ原判決ハ被告上告人又右衛門主張ノ如ク本件土地ノ所有權カ同人ニアル旨ヲ認定スルニ當リ同人ノ爲ニスル右認定ノ理由證據トシテ前記判例第二號證據ヲ援用シタルコトハ之亦前記判例理由記載ニ供シ極メテ明瞭ナリ即チ原判決ハ被告上告人ノ援用セザル證據ヲ採ツテ被告上告人ノ主張事實認定ノ資料ニ供シタル違法アリ仍テ破毀ヲ免レサルモノト信ス

爲シ來リタルモノナルモノヲ與レ渡シタルニ非ス讓渡シタルモノニ非スシテ停止條件附契約ナリト認定シタルモノニシテ右ノ認定ハ明カニ實法則ニ反スル不當不法ナル判例ナリト謂ハサルヲ得ス破毀ヲ免レサルモノナリト信ス云々

於テ援用セザルニ拘ラス後段設示ノ如ク認定ノ一資料ニ供シタルハ固ヨリ相當ニシテ此ノ點ヲ云フスル論旨第一點ハ採用シ難シ又原告ハ右第二號證據及所論乙第一號證據ノ他舉示ノ各證據ヲ綜合シテ本件不動産外十四番ハ明治二十年四月二月中被告上告人庄司又右衛門先代兵右衛門カ上告人先代庄司伊左衛門ニ對シ原判例ノ如キ停止條件附契約ヲ爲シタルモ其ノ後條件成就ノ結果右衛門契約ノ效力ハ發生セシ途ニ右伊左衛門ニ於テ其ノ所有權ヲ取得スルニ至ラザリシモノナル旨認定シタルモノニシテ右證據ニ依レハ原告認定モ亦爲シ得レザルニ非ス而モ右認定ハ何等所論ノ如ク社會通念若ハ實法則ニ反スルモノト云ヒ難ク論旨第三點所論ノ如ク右衛門後上告人先代伊左衛門及上告人ニ於テ多年本件不動産外十四番ノ公租ヲ納入シ其ノ使用收益ヲ繼續シ來リタル事實アレハトテ右事實ハ必シモ前記認定ヲ妨グルコトナシ論旨第二點及第三點ハ孰レモ原告カ職權上適正ニ爲シタル證據ノ判斷事實ヲ認定スルモノニ歸シ採用スルニ足ラス

○競落人カ配當ヲ受ケタル債權者ノ擔保責任ヲ追及スル場合ノ除斥期間

競落人カ既ニ一年ノ期間内ニ債權者ニ對シ代金ノ渡額ヲ請求シタルトキハ其ノ擔保責任ヲ追及セんとスル意思ハ除斥期間内ニ行使セラレタルモノト云ヒ得ヘキカ故ニ假令債權者ニ對シ請求力右ノ一年經過後ニ爲ササルモ債權者權ハ過法ニ保全セラルルモノト云ハザルヘカラス

【參照條文】 民法五六八條一項二項同五六四條

昭和十五年(オ)第五百六號

福岡縣筑前郡二日市町二丁目九百五十五番地

上告人 株式會社武右衛門

右代表者 藤田士郎

福岡縣福岡市橋口町六十二番地

被告 山本春次郎

同市吳屋町七番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

同市橋町十四番地

モノノ契約ニ非ス即チ附與契約ト附與スヘキ契約トハ明カニ相違サレハ原判決ハ判例事實ト判示理由トノ間ニ明確ナル區別アリモノニシテ違法ナリ加之前記判例事實ヨリ見レハ上告人ハ附與ニヨリ所有權ヲ取得セルモノナル旨ヲ主張セルモノニシテ若シ將來附與スヘキ契約ナリトセハ極力爭フモノナル事ハ判例事實ニ徴シ明瞭ナリ然レニ原判決ハ其理由ニ於テ附與スヘキ旨ノ契約ナルコトハ當事者間ニ爭ナシト判示シタルハ爭ナル事實ヲ爭ナシト判示シタルモノニシテ又上告人ハ附與スヘキ旨ノ契約ヲ爲シタルコトハ爭ナシト主張セザル事ハ判例事實ニ徴シ明瞭ナレハ當事者ノ主張セザル事實ヲ主張シタルモノナリト判示セルモノニシテ何レノ點ヨリスルモ原判決ハ破毀ヲ免レサルモノト思料スト云フニ在リ

然レトモ第一審判決事實摘示及原告辯論ノ結果ニ依レハ被告上告人又右衛門先代兵右衛門及上告人先代伊左衛門間ニ於テ本件土地ノ内十七番ノ一山林外十四番ノ土地ニ付書面ニ依リ附與契約ノ成立シタルコトハ當事者間ニ爭ナカリシ事明白ナルヲ以テ原告カ理由冒頭ニ於テ其ノ旨所論引用ノ如ク判示シタルモノニシテ右判文中「附與スヘキ旨ノ契約ヲ爲シタル」トハ畢竟本件附與契約ノ成立ヲ指稱セル總旨ナルコト極メテ明白ナルヲ以テ何等所論ノ如キ違法ナク論旨ハ徒ラニ原判例文ノ用語ノ末ニ拘泥シテ之ヲ曲解セントスルモノニ外ナラザルヲ以テ到底採用ノ限リニ非ス

上告理由第五點ハ原判決ハ上告人カ原告ニ於テ原判決ヲ取消ス被控訴人責治ハ別紙目録記載ノ不動産ニ付仙臺區裁判所廣

○競落人カ配當ヲ受ケタル債權者ノ擔保責任ヲ追及スル場合ノ除斥期間

左衛門ニ於テ分家ヲ爲スニ當リ之ヲ他ノ十四番ノ不動産ト共ニ右兵右衛門ヨリ贈與(書面ニ依ル)ヲ受ケ爾來今日ニ至ル迄原告家ニ於テ使用收益シ來リタルモノナリ然レニ右贈與財産ノ別紙目録記載ノ不動産以外ノ十四番ニ就テハ昭和十年七月二十五日原告ニ於テ被告又右衛門先代兵右衛門ヨリ之カ所有權移轉登記ヲ受ケタル別紙目録記載ノ不動産ニ就テハ未タ其登記手續ヲ經由シ居ラサルモノナル處被告又右衛門ハ右不動産カ偶々登記簿上同被告名義ナルヲ寄託シ昭和十四年四月一日擅ニ之ヲ被告責治ニ讓渡シ云々」ト記載アリテ附與契約ニ因リ本件土地ノ所有權ヲ取得シタルモノナル事ヲ主張セル事ハ第二審ニ於テ控訴代理人ハ「假ニ控訴人先代伊左衛門カ明治二十年舊二月中附與契約ニヨリ本件土地所有權ヲ取得セザリシトスルモノ云々」時効ニヨリ其所有權ヲ取得シタルモノナルヲ以テ云々」ノ事實摘示ト相俟ツテ極メテ明瞭ナリ別言スレハ附與スヘキ契約ト主張シタルニ非スシテ附與ヲ受ケタルモノナリト主張シタルモノナリノ法律的二說明スレハ上告人ノ右主張ハ將來附與スヘキ契約(豫約)ニ非スシテ附與ソノモノノ契約ナルノミナラス所有權移轉ノ物權契約モ行ハレタル結果其所有權ヲ取得シ爾來使用收益シ來リタルモノナル旨ノ主張ヲ爲シタルモノナリ然レニ原判決判示理由見ルニ「本件土地(十七番)ノ三ノ契約ヲ爲シタル事ハ右契約カ條件附契約ナリヤ否ヤ除キ當事者間ニ爭ナク云々」ト判示シタリ此ノ判示理由ニ依レハ附與スヘキ旨ノ契約ナルヲ以テ附與其ノ

有ノ不動産ノ競賣ノ場合ニモ直チニ競賣其モノヲ無効トシ不當利得ノ觀念ヲ以テ之ヲ整理セシ賣買ノ效力ノ規定ヲ以テ法律セントスル法意ヲ闡却セル怨ミアルノミナラス本件建物カ國松靜子ノ所有ナルコトヲ知ルヤ被上告人ニ於テ之ヲ同人ヨリ買受ケタリトハ被上告人國松靜子第一審ニ於テ本人訊問ノ際供述セル處ニシテ證人中西七次郎モ亦其趣旨ヲ供述シ既ニ被上告人ハ競買ノ目的ヲ達シ債務者三浦八郎ハ之ヲ國松靜子ヨリ取得シテ被上告人ニ移轉セントスルモ被上告人ノ爲メニ阻マレ遂ニ爲スヲ得サルニ至レルモノニシテ斯ル場合ハ民法第五百六十一條第五百六十三條ノ關係ヲ離レ履行不能ノ一般原則タル同法第五百四十三條又ハ第四百五十五條ニヨリ律ニ從テ同法第五百六十八條ハ其適用ナキニ歸シ上告人ニ對シテ請求權發生ノ基本ヲ失ヘルモノト謂フヘシ此コトハ原審ニ於テ上告人カ昭和十五年二月七日付陳述書第五項ニ於テ陳述セル處ナリ然ルニ原判決ハ此點ニ付何等ノ考慮ヲ加ヘス觀落當時ノ情況ノミニ著眼シ上告人ニ其責任アリト判示シタルハ審理不盡ノ違法アリ破毀ヲ免レスト思料スト云フニ在リ

然レトモ三浦八郎カ本件建物ノ所有權ヲ國松靜子ヨリ取得シテ被上告人等ニ移轉シ能ハサルコト並ニ八郎カ無資力ナルコトハ原審カ證據ニ依リ適法ニ之ヲ判定シタルコト其旨ニ依リ之ヲ窺知スルニ十分ナルヲ以テ原判決ニハ所論ノ如キ違法ナシ論旨ハ排斥ヲ免レズ

上告理由第四點ハ原判決ハ代金減額ノ其割合ヲ定ムル基本ニ誤解アルモノト信ス原判決カ本件代金減額ノ數量金八百八十

八四六十五錢ヲ認メタル其基本金額ニ二千八百六十圓ハ甲第六號說ノ二ナル評價書ニ基ケル旨判示セル處其建物千二百二十圓ナル評價ハ同地上ニ存置シ得ルモノトシテノ價額ナリ然ルニ原判決ハ本件建物ハ土地所有權以外ノ國松靜子ノ所有ナリト認定セルヲ以テ果シテ然ラハ同建物ハ無權限ノ存置ト爲リ材木トシテノ價值有スルニ過キサレハ其標準ヲ以テ減額ノ數量ヲ計出セサルハカラサルニ原判決ハ土地建物ノ所有權同一ノモノトシテ評價シタル當時ノ價額ヲ標準トシテ計出シタルハ其方法ヲ誤リタルモノニシテ理由ニ顯爾アルニ歸シ到底破毀ヲ免レサルモノト思料スト云フニ在リ

然レトモ原審ハ甲第六號說ノ一、二ニ依據シテ本件建物ニ對シテ賣得金ヲ金八百八十八圓六十五錢(單位以下切捨)ト認定シタルモノニシテ右證據ニ依レハ斯ル認定ヲ爲シ得サルニ非ス然ラハ之ヲ批難ス本論旨ハ結局原審カ證據判斷事實認定ニ付由シタル專權行使ヲ批難スルニ歸シ其ノ理由ナキモノトス

仍テ民事訴訟法第四百一條第九十五條第八十九條ニ則リ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十月二十一日
大審院第一民事部

裁判長 吉田 久
列事 犬丸 正
列事 藤田 喜一
列事 齋藤 實一
列事 黒川 耐 而

○湯口權カ原泉地所有權ト獨立シテ處分セラルル地方慣習法

右當事者間ノ強制執行異議事件ニ付東京控訴院カ昭和十四年十月十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ム

【主 文】
原判決ヲ破毀シ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

【理 由】
上告理由第七點ハ上告人ハ原審ニ於テ假ニ被上告人(被控訴人)ノ前主カ本件ノ湯口權ヲ取得シタルトスルモ何等共公示方法ヲ履踐セサルヲ以テ被上告人ハ該權利ヲ第三者タル上告人ニ對抗スルコトヲ得サルモノナリト抗辯シタリ然ルニ原判決ハ此點ニ關シテ而シテ長野縣松本地方ニ於ケル所謂湯口權カ溫泉湧出地(原泉地)ヨリ引湯使用スル一種ノ物權ノ權利ニシテ通常原泉地ノ所有權ト獨立シテ處分セラレ之カ處分ハ意思表示ノミヲ以テ爲サルル地方慣習法ニ依リ之ヲ當然ニ顯著ニシテ權利ノ變動ヲ以テ第三者ニ對抗スルニ付キ公示方法其他特別ノ方式ヲ履踐スルコトヲ要スル旨ノ規定ナキカ故ニ右權利ノ變動ハ其自體何人ニ對シテモ對抗シ得ルモノト謂フヘク從テ被控訴人(被上告人)ハ右湯口權ヲ取得ヲ以テ控訴人(上告人)ニ對抗スルコトヲ得ヘキモノト謂フヘカラスト判示シ以テ上告人ノ右抗辯ヲ排斥シタリ然レトモ立木法ニ依ラサル立木其他採取ノ稻毛桑葉等ノ土地ノ果實カ獨立シテ所有權ノ客體ト認メラレ其所有權ノ變動ハ當事者間ニ於テハ其意思表示ニヨリ其效力ヲ生スルモノ第三者ニ對スル關係ニ於テハ立札其他ノ標識ヲ掲タル等他人ヲシテ其實質ヲ明認セシムヘキ公示方法ヲ講スルニ非サレハ其物權變動ヲ第三者ニ對抗スルコトヲ得サルハ古來御判例ノ屢次判示セラル

【大審院判決全集】第七卷一四二二

湯口權カ原泉地所有權ト獨立シテ處分セラルル地方慣習法

右當事者間ノ強制執行異議事件ニ付東京控訴院カ昭和十四年十月十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ム

【主 文】
原判決ヲ破毀シ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

【理 由】
上告理由第七點ハ上告人ハ原審ニ於テ假ニ被上告人(被控訴人)ノ前主カ本件ノ湯口權ヲ取得シタルトスルモ何等共公示方法ヲ履踐セサルヲ以テ被上告人ハ該權利ヲ第三者タル上告人ニ對抗スルコトヲ得サルモノナリト抗辯シタリ然ルニ原判決ハ此點ニ關シテ而シテ長野縣松本地方ニ於ケル所謂湯口權カ溫泉湧出地(原泉地)ヨリ引湯使用スル一種ノ物權ノ權利ニシテ通常原泉地ノ所有權ト獨立シテ處分セラレ之カ處分ハ意思表示ノミヲ以テ爲サルル地方慣習法ニ依リ之ヲ當然ニ顯著ニシテ權利ノ變動ヲ以テ第三者ニ對抗スルニ付キ公示方法其他特別ノ方式ヲ履踐スルコトヲ要スル旨ノ規定ナキカ故ニ右權利ノ變動ハ其自體何人ニ對シテモ對抗シ得ルモノト謂フヘク從テ被控訴人(被上告人)ハ右湯口權ヲ取得ヲ以テ控訴人(上告人)ニ對抗スルコトヲ得ヘキモノト謂フヘカラスト判示シ以テ上告人ノ右抗辯ヲ排斥シタリ然レトモ立木法ニ依ラサル立木其他採取ノ稻毛桑葉等ノ土地ノ果實カ獨立シテ所有權ノ客體ト認メラレ其所有權ノ變動ハ當事者間ニ於テハ其意思表示ニヨリ其效力ヲ生スルモノ第三者ニ對スル關係ニ於テハ立札其他ノ標識ヲ掲タル等他人ヲシテ其實質ヲ明認セシムヘキ公示方法ヲ講スルニ非サレハ其物權變動ヲ第三者ニ對抗スルコトヲ得サルハ古來御判例ノ屢次判示セラル

【大審院判決全集】第七卷一四二二

上告費用ハ上告人ノ負擔トス

【理 由】
上告理由第一點ハ原判決ハ代金減額請求行使期間ニ誤解アルモノト信ス原判決ハ「依テ民法第五百六十四條ニヨリ一年內ニ控訴人ニ對シテ之カ權利ノ行使ヲ爲スヘキニ不拘之ヲ爲サザリシヲ以テ本訴請求ハ不當ナル旨主張スレトモ被控訴人等カ右事實ヲ知リタル時ヨリ一年內ニ債務者タル三浦ニ對シテ代金減額請求ヲ爲シタルコトハ前記認定ノ如クニシテ債務者ニ於テ一年內ニ債務者ニ對シテ之カ減額ノ請求ヲ爲シタル以上ハ債務者ニ對シテ代金減額ノ請求ハ一年ヲ經過スルモ適法ナルコト同ヨリ當然ナレハ控訴人ノ右抗辯ハ採用スルニ由ラザリト判示シ上告人ノ代金減額請求權行使期間經過ノ抗辯ヲ排斥シタリ然レトモ債務者無資力ノ爲メ債務者カ配當ヲ受ケタル代金ノ返還ヲ爲ササルヘカラサル債務ハ保證債務ニアラス獨立セル債務ナリ債務者ニ對シ一旦代金減額ノ請求ヲ爲シタル以上其時効期間満了ノ連斷スヘカラス蓋シ法律カ代金減額請求ヲ一年ノ短期間ニ行使スヘク要求スル所以ノモノハ賣買ノ效力カ確定セシメンカ爲メナリ此必要ハ債權者トノ間ニ於テモ亦同様ナリ債權者ハ競買手續完結ニヨリ其競買ハ有效ナルモノト信スルヲ普通トス然ルニ被上告人カ一旦債務者ニ對シテ代金減額請求ヲ表意ヲ爲シタルカ爲メ長年月經過後債務者無資力ナリトテ債權者ニ對シテモ配當ヲ受ケタル代金ノ返還ヲ請求シ得ルモノトセシカ債權者ハ不測ノ逆戻リヲ生シ更ニ其トキニ至リ債務者ニ對シ債權ノ行使ヲ爲ササルヘカラス

其債務ニハ他ニ擔保物存スルコトアルヘク又連帶債務者或ハ保證人附隨セルコトモアルヘシ然ルニ二十年後ニ至リ代金ノ返還ヲ餘儀ナクセシメラレ其トキ初メテ前債權ノ行使ヲ爲サントスルモ時既ニ過ク結局債權者ノ損失ニ歸スルコト往々アルヘシ何ゾ夫レ競落人ヲ保護スルコト厚クシテ債權者ヲ遇スルニ酷ナルヤ少クトモ債權者ニ對シテモ一年內ニ之カ用意ヲ爲スヘキ機會ヲ與フルコトヲ要スルモノト爲サザレハ權衡ヲ失ス原判決ハ思ヒテ致サス債權者ニ對シテハ此一年ノ制限ニ從フコトヲ要セサルモノト判示シタルハ此法律ノ解釋ニ誤解アリ破毀ヲ免レサルモノト信ス云フニ在リ

然レトモ競賣法ニ依ル競賣ニ於テモ強制執行ノ場合ニ於ケル同法第五百六十八條ノ規定ニ準據シ競賣ノ目的カ第一三者ノ所有ニ屬スル爲メ其ノ所有權ヲ競落人ニ移轉スルコト能ハサルトキハ物件所有權タル債務者ハ第一次ニ競落人ニ對シ其擔保責任ヲ負擔シ若シ債務者カ無資力ニシテ其ノ責任ヲ果シ得サルトキハ代金ノ配當ヲ受ケタル債權者カ第二次ニ擔保責任ヲ負シテ其ノ代金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ爲スヘキモノト解スルハ相當トス而シテ民法第五百六十八條第五百六十三條第五百六十四條ノ規定ニ依リ一年內ニ行使スルコトヲ要スル代金減額請求權ハ債權者ニ對シテ行使セラルヘキモノトナリコト前記法律ノ明文ニ徴シ明カナルモノトス元來債權者ノ競上擔保義務ハ競落人ヨリ之ヲ觀ルトキハ債務者ノ擔保義務ト其目的性質ヲ同シクシ唯債務者カ無資力ノ爲メ減額ノ請求ニ應ジ其ノ義務ヲ履行シ難キトキ補充的ニ之カ履行ヲ強要

シシメラルルモノタルニ過キス而モ競落人カ既ニ一年ノ期間內ニ債務者ニ對シテ代金減額ノ請求シタルトキハ其ノ擔保責任ヲ追及セントスル意思ハ除斥期間內ニ行使セラレタルモノト云ヒ得ヘキカ故ニ假令債權者ニ對シテ請求カ有ヘキ故ニ後ニ爲サルモ該請求權ハ適法ニ保全セラルモノト云ハサルヘカラス若シ然ラハ「一、年ヲ經過シタルトキハ競落人ハ債務者ヨリ減額代金ノ返還ヲ受ケ得サルニ於テモ遂ニ債權者ニハ追及シ得サルニ至リ不當ナル結果ヲ生スルニ至ルヘケレハナリ原判決ハ前記說明ト同趣旨ニ出テ被上告人等ノ上告銀行ニ對シテ請求ヲ認容シタルモノニシテ洵ニ正當ナリ之ヲ批難スル本論旨ハ探容ニ由ナキモノトス

上告理由第二點ハ原判決ハ民法第七十七條ニ誤解アルモノト信ス原判決ハ「本件建物ハ訴外國松廣吉ニ於テ之ヲ建築所相續ニ因リ其ノ所有權ヲ承繼シタルモ未タ保存登記ヲ爲サザリシトコト云々」ト判示シ國松靜子ノ本件建物ノ所有權原取得メナカラシシテ承繼取得ナルコトヲ認メナカシ其登記ヲ爲シ居ラサルヲ以テ上告人ニ對シ其所有權ニ對抗シ得サル旨ノ上告人ノ抗辯(昭和十四年三月二十四日付上告人ノ第一審ニ於ケル追加抗辯申立書第二項記載及第一審判決被告答辯第三項(イ)記載)ニ對シ何等ノ判示ヲ爲サス然レトモ民法第七十七條ノ規定ハ其物權得變更ノ原因カ當事者ノ意思表示ニ在ルトヲ相續ニ在ルトヲ區別セシメテ適用ノアルコトハ夙ニ御判例ノ存スル處(大正九年五月十一日判決)

【主 文】
原判決ヲ破毀シ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

【理 由】
上告理由第三點ハ原判決ハ民法第五百六十一條第五百六十三條ノ履行不能ナル意義ニ誤解アルモノト信ス原判決ハ其理由ノ冒頭ニ於テ本件建物カ債權者三浦八郎ノ所有ニアラスシテ國松靜子ノ所有ニ屬スルコトヲ判示シ直チニ被上告人等ハ三浦ニ對シテ代金減額ノ請求ヲ爲シタルモ同人ハ無資力ナル爲メ上告人ニ對シテ之レカ請求ヲ爲シ得ル旨ヲ判示シ三浦ノ同建物及國松靜子ヨリ取得シテ被上告人ニ之ヲ移轉シ得サル點ニ論及セシ民法カ他人所

ナレハ國松靜子ハ其所有權ヲ以テ上告人又ハ被上告人ニ對抗シ得サルニヨリ被上告人ハ競落ニ因リ完全ニ所有權ヲ取得セラルモノナレハ代金減額ノ請求ハ排斥セサルヘカラスナルニ拘ラス原判決ハ此點ニ付何等說明ヲ與ヘス漫然被上告人ノ本訴請求ヲ認容シタルハ判決ニ理由ヲ附セサル違法アルカ又ハ法律ノ解釋ヲ誤リタルカノ違法アルヲ免レスト思料スト云フニ在リ

然レトモ原判決ノ適法ニ確定シタルコトニ依レハ本件建物ハ元國松廣吉ノ所有ニ係リ國松靜子ハ相續ニ因リ之カ所有權ヲ取得シタルモノナルコト三浦八郎ハ該建物カ未登記ナルヲ奇貨トシ擅ニ自己名義ニ保存登記ヲ爲シタル以上上告銀行ノ爲メ之ニ對シ抵當權ノ設定ヲ爲シタルモノナルカ故ニ八郎ハ勿論上告銀行モ其ノ善意惡意ニ拘ハラズ國松靜子ニ對シテハ登記ノ欠缺ヲ主張スルニ付正當ノ利益ヲ有スル第三者ナリト稱シ得サルモノトス原判決ハ此ノ趣旨ニ於テ上告銀行ノ登記欠缺ノ抗辯ヲ排斥シタルモノナルコト判文ノ前後ヲ通讀スルニ依リ之ヲ領シ得ヘキヲ以テ本論旨ハ探容ニ值セズ

上告理由第三點ハ原判決ハ民法第五百六十一條第五百六十三條ノ履行不能ナル意義ニ誤解アルモノト信ス原判決ハ其理由ノ冒頭ニ於テ本件建物カ債權者三浦八郎ノ所有ニアラスシテ國松靜子ノ所有ニ屬スルコトヲ判示シ直チニ被上告人等ハ三浦ニ對シテ代金減額ノ請求ヲ爲シタルモ同人ハ無資力ナル爲メ上告人ニ對シテ之レカ請求ヲ爲シ得ル旨ヲ判示シ三浦ノ同建物及國松靜子ヨリ取得シテ被上告人ニ之ヲ移轉シ得サル點ニ論及セシ民法カ他人所

ル法律ナリトス而シテ法律上何等ノ明
文ナキニ拘ラス御院カ土地果實ノ處分ニ
付右ノ如キ對抗要件ニ關スル特殊ノ法理
ヲ指示セラレタル所以ハ實際ノ取引通念
上立木其他土地ノ果實ニ關スル取引ニ付
テハ排他性ヲ有スル物權ノ效力ヲ認ム
ルノ必要アルモ單ニ當事者ノ意思表示ノ
ミヲ以テ其處分ヲ第三者ニ對抗シ得ルモ
ノトモテハ第三者ヲシテ不測ノ損害ヲ蒙
ルシメタリシテ取引ノ安全ヲ阻害スルヲ以
テ第三者ヲ保護シ且取引ノ安全ヲ確保ス
ル必要上右ノ如キ特殊ノ對抗要件ヲ案出
セラレタルモノナル事明白ナリ果シテ然
ラハ本件湯口權ノ如ク原泉地ノ所有權ト
獨立シテ處分セラレヘキ一種ノ物權ノ權
利ニ付テモ亦立木其他土地ノ果實カ土地
ノ所有權ト獨立シテ處分セラレル場合ト
同シク其權利ノ變動ニ付テハ右ノ如キ特
殊ノ對抗要件ヲ履スルコトヲ要スルモ
ノト謂ハサルヘカラス何トナレハ若シ原
判決ノ說示セラレタル如ク「湯口權ノ變動
ヲ以テ第三者ニ對抗スルニ付キ公示方法
其他特別ノ方式ヲ履スルコトヲ要スル
旨ノ規定ナキカ故ニ右權利ノ變動ハ其レ
自體何人ニ對シテモ對抗シ得ルモノト謂
フヘキ」モノトセハ第三者ヲシテ不測ノ
損害ヲ蒙ラシメ以テ取引ノ安全ヲ阻害ス
ルニ至ルヘキコトハ法律上對抗要件ニ付
キ何等ノ規定ナキ立木其他土地ノ果實ニ
關スル取引ノ場合ト全ク同一ニシテ法理
上兩者ヲ區別スヘキ何等ノ理由ナキヲ以
テナリ故ニ立木其他土地ノ果實ニ關スル
取引ニ付キ第三者ヲ保護シ以テ取引ノ安
全ヲ確保スル爲メ右ノ如キ特殊ノ對抗要
件ヲ必要トスル法理ハ之ト全ク同様ナレ
本件湯口權ニ關スル取引ニ付テモ亦當然

應用セラルヘキコト勿論ナリトス從テ原
判決ノ說示スル如ク本件ノ湯口權カ一種
ノ物權ノ權利ニシテ原泉地ノ所有權ト
獨立シテ處分セラレヘキモノナル以上ハ
土地果實ノ處分ノ場合ト同シク立札其他
ノ標識ヲ掲ケル等第三者ヲシテ其事實ヲ
明認セシムヘキ公示方法ヲ講スルニ非サ
レハ其處分ヲ第三者ニ對抗スルコトヲ得
サルモノト論斷スヘキハ當然ナリ又若シ
原審カ兩者ヲ區別シテ立木其他土地果實
ノ處分ニ付テハ對抗要件ヲ必要トスルモ
本件湯口權ノ處分ニ付テハ特ニ必要ナシ
トスル法理上ノ根據アリトノ見解ナリト
セハ其理由ヲ具シテ明示スル必要アルコト
勿論ナルニ拘ラス原判決カ敘上ノ如ク本
件湯口權ノ處分ニ付テハ單ニ公示方法ヲ
履スルコトヲ要スル旨ノ規定ナシトノ
一事ヲ以テ該權利ノ變動其レ自體何人
ニ對シテモ對抗シ得ルモノナリト斷斷シ
全然特別ノ理由ヲ説明セシメシテ此點ニ關
スル上告人ノ抗辯ヲ排斥シ本件ニ於ケル
最モ主要ノ爭點ニ付キ十分ノ判斷ヲ爲サ
サルハ即チ法則ヲ不當ニ適用セサルカ又
ハ理由不備ノ違法アルモノニシテ原判決
ハ此點ニ於テモ破綻ヲ免レサルモノト信
スト云フニアリ

本件ニ於ケル被告上告人主張ノ要旨ハ上告
人ハ昭和十年十月一日訴外給木豐藏ニ對
スル債務名義ニ基キ當時同人所有ノ長野
縣東筑摩郡本郷村大字淺間字淺間五百自
番地ノ土地ヨリ湧出シ同訴外人ニ於テ自
ラ同郡同村大字道添八十七番地ノ湯ニ引
用シ居リタル湯口權(温泉專用權)ニ對
シ強行執行ヲ爲シタルカ右湯口權ハ被告
上告人ノ前主株式會社長野農工銀行カ昭
和五年十一月中前訴外人ヨリ其ノ原泉
地ト共ニ買受ケ爾來同人ニ貸貸中被上告
人ハ右銀行ヲ合併シ其ノ權利ヲ承繼シタ
ルモノニ係リ右訴外人ノ權利ニ屬セサル
ヲ以テ上告人ノ爲シタル前記強制執行ノ
排除ヲ求ムト謂フニ在ルコト原判決ニ徴
シ明白ナルトコロ原審ハ之ニ對シ被告上告
人前主株式會社長野農工銀行カ昭和五年
中訴外給木豐藏ヨリ本件湯口權ヲ其ノ原
泉地ノ所有權ト共ニ買受ケ取得シタル事
實並ニ被告銀行カ右長野農工銀行ヲ合
併シタル事實ヲ認定シタル上長野縣本
地方ニ於ケル所謂湯口權カ温泉湧出地
(源泉地)ヨリ引湯使用スル一種ノ物權
ノ權利ニシテ通常源泉地ノ所有權ト獨立
シテ處分セラレヘキカ分ハ意思表示ノミ
ヲ以テ爲サルル地方慣習法存スルコト原
院ニ顯著ナル旨判示シタルニ拘ラス叙上
權利ノ變動ヲ以テ第三者ニ對抗スルニ付
テハ公示方法其ノ他特別ノ方式ヲ履スル
ルコトヲ要スル旨ノ規定ナキカ故ニ右權
利ノ變動ハ其レ自體何人ニ對シテモ對抗
シ得ヘク從テ被告上告人ハ右湯口權ノ取得
ヲ以テ直チニ上告人ニ對抗シ得ヘキ旨斷
定シ以テ被告上告人ノ本訴請求ヲ認容シタ
リ仍テ案スルニ凡ソ地中ヨリ湧出スル温
泉自體ハ之ヲ該湧出地所有權ノ一内容ヲ
構成スルモノト解スヘキヤ若クハ右土地
所有權ニ對シ獨立セル一種ノ利益ノ支配
權ナリト解スヘキモノナリヤ否ヤハ此種
地下水ニ關シ特別ノ立法ヲ缺カセル我法
制ノ下ニ在リテハ解釋上疑義ナキ能ハサ
ルモノ本件係争ノ温泉專用權即所謂湯口
權ニ付テハ該温泉所在ノ長野縣本地方
ニ於テハ右權利カ温泉湧出地(源泉地)
ヨリ引湯使用スル一種ノ物權ノ權利ニ屬
シ通常源泉地ノ所有權ト獨立シテ處分セ

「大審院判決全集」第七輯(四二四)
ラ、ル地方慣習法存スルコトハ湯口權ノ如
ク原審ノ判定セル處ニシテ而モ敘上ノ湯
口權ハ訴外給木豐藏カ當時同人所有ノ土
地ヨリ湧出セル温泉ヨリ自ラ他ノ地點ニ引
湯使用セルモノニシテ即所謂源泉地權自體
ニ外ナラサルコトハ原判決ニ徴シ明白
ナリトス然レトモ既ニ地方慣習法ニ依
リ如上ノ排他性ノ支配權ヲ肯認スル以上此
種權利ノ性質上民法第七十七條ノ規定
ヲ類推シ第三者ヲシテ其ノ權利ノ變動ヲ
明認セシムルニ非レハ之ヲ以テ第三者ニ對
テ抗スルモノト解スヘキコトハ敘上ノ言
ヲ俟タルカ故ニ原審ハ更ニ此點ニ付考
慮ヲ拂ヒ右地方ニ在リテモ例ハ温泉組
合乃至ハ地方官廳ノ登錄等ニシテ公示
ノ目的ヲ達スルニ足ルヘキモノ存スルヤ
否ヤハ事情ニ依リテハ温泉所在ノ土地
自體ニ對シテ登記ノミニ依リテ第三者ヲシ
テ抗スル權利變動ノ事實ヲ明認セシムルニ
足ルヘキヤ否ヤニ付須ク審理判斷ヲ與ヘ
サルヘカラス筋節合ナリトス然レトモ原
審ノ措置茲ニ出テ本件湯口權ニ付テハ設
示ノ如ク何等特殊ノ公示方法ヲ要スルコ
トナクシテ直チニ被告上告人ノ本件湯口權
ノ取得ヲ上告人ニ對抗シ得ヘキ旨斷斷シ
タルハ即チ法則ヲ誤解シ延テ處理不備ニ陥
リタルモノト謂フヘキ旨理由アリ

昭和十五年九月十八日
大審院第三民事部
裁判長 津田 共之
判事 高田 貞一
判事 古川 龍一

刑事之部

臨時措置法第五條ニ
所謂「違反シタル者」

ニハ法人ヲ含マヌカ

輸出入品等ニ關スル臨時措置ニ關スル
法律第五條ニ所謂「違反シタル者」ト
ハ違反行為者即犯罪ノ主體タル者ト云
フ意味ニ外ナラザルガ故ニ犯罪行為能
力者タル自然人ヲ指稱シ法人ヲ包含セ
ザルモノト解スルヲ正當トス
昭和十五年(九)第七三一號
判決

本籍並住居大阪府東區南區具塚町近本千
二十八番地ノ一
無職(元株式會社信託會商店代表取締役)
帶谷吉太郎
明治十三年八月一日生
右輸出入品等ニ關スル臨時措置ニ關スル
法律違反被告事件ニ付昭和十五年五月二
十四日大阪地方裁判所ニ於テ言渡シタル
第二審判決ニ對シ被告上告人ハ上告ヲ爲シタ
リ因テ判決スルコト左ノ如シ
【理 由】
(中略)
辯護人鈴木喜三郎上告趣意書
第三點ハ原裁判所ハ輸出入品等ニ關スル
臨時措置ニ關スル法律第二條同第五條物
品販賣價格取縮規則第一條ノ解釋ヲ誤リ
漫然上告人ヲ所斷シタル違法アリ按スル
ニ右法律ニ依リ制限ヲ受ケ命合セラレ又
ハ其ノ指定セラレタル公定價格ヲ超過シ
テ指定物品ノ販賣ヲ爲スヘカラスル者而

シテ右命令處分ニ違反シタル者(前記法
律第五條)即チ前記法律ニ所謂「中ニ
法人ヲ包含スル事ハ一點ノ疑ヲ容レサル
所ナリ何トナレハ右法律ニ定メタル物品
ノ製造販賣ノ目的トスル法人ニ在リテハ
法人ニ對シ之カ禁止命令ヲ爲サザレハ法
ノ目的ヲ達成シ得サルヲ以テナリ然レ而
シテ本件上告人ハ株式會社信託會商店ノ代
表取締役トシテ專ラ帶谷商店ノ目的事業
タル取組ヲ行ヒ、サリシ細線雲等ヲ山本
長之助ニ販賣(公定價格ヲ超過セシメテモ
超過金ヲ自己ノ所得ト爲ス意思ニアラサ
シテ專ラ帶谷商店ノ收入トスル爲メ)シタ
ルモノ即チ會社ノ爲ニ爲シタル販賣ナル
意思表示カ同時ニ前記法律ニ低價スルニ
至リタルモノニ過キスシテ上告人帶谷吉
太郎個人ノ行為ハ毫末モナク專ラ株式會
社帶谷商店ノ行為(上告人カ機關トシテ
代表シタルモノ)ノミ存シタルモノナ
ル事ハ本件一件記録ト第一審辯護和田區裁
判所カ之ヲ理由トシテ株式會社帶谷商店
ヲ處罰シタル事ニヨリ極メテ明白無疑キ
事實ナリ由來法人ハ擬制ニシテ實在ニ
ラサルニヨリ不法行為能力殊ニ犯罪能力
ナキモノトセラレ法人ノ爲メ爲シタル犯
罪行為ニ在リテモ是レ代表者其他自然人
ノ行為ニシテ法人ノ行為ニ在ラス法人ハ
右自然人ノ行為ニ付キ特ニ處罰ヲ受ケヘ
キ旨ノ特別規定アル場合ニ限リ處罰ヲ受
ケタルモノナリト爲ス觀念ハ最近法人論理
ノ進ミタル今日實在論者ノ採ラサル所ナ
リ即チ法人ノ不法行為能力共ニ犯罪行
爲能力ヲ認ム不明文ヲ以テ法人ノ犯罪行
爲能力ヲ認ム規定ハ明治三十三年法律
第五十二號ナリ此ノ法規ハ鑛業法第六六
條漁業法第六十五條保險業法第百條ノ二

等ニ依リテ準用セラレ其他法人ノ犯罪能
力ヲ認メタル特別法數多存スル所ナリ
犯罪ノ性質上法人ノ犯罪能力ヲ認メ難キ
モノニ在リテハ兎モ角本件犯罪ノ内容ノ
如ク法律行為(販賣)即チ他罰則違反
トナル行為ニ在リテハ法人ノ機關代表
者カ法人ノ目的遂行ノ爲メ專ラ法人ノ
意思表示ヲ爲シタルニ止ル場合ニ在リ
テハ法人ノ行為アルノミト爲サザレハ
ラサ此場合ニモ猶犯罪行為ノ部分ハ自然
人ノ行為ニシテ法人ノ行為ニアラスト
ヘキ法理上實際上ノ根據アルコトナシ尤
モ臨時措置ニ關スル法律第七條ニ依リ
法人ノ代表者又ハ法人若シクハ人ノ代理
人使用人其他ノ從業者カ其ノ法人又ハ人
ノ業務ニ關シ前記法律違反行為ヲ爲シタ
ルトキハ行為者ヲ罰スルノ外其ノ法人又
ハ人ニ對シ亦前記法律ノ罰金刑ヲ科ス云々
トアリ是ニヨリハ縱令法人ノ代表者カ其
ノ機關トシテ爲シタル場合ニ於テモ代表
者個人トシテ罰セラルルモノノ如ク見ユト雖
ヨリ更ニ罰セラルルモノノ如ク見ユト雖
モ前記法律第二條第五條第一條ニ所謂
「者」ニハ前述ノ通り法人ヲ包含スルコ
ト當然ナルヲ以テ法人ハ其ノ機關ノ行為
ニ付キ右第七條ノ規定ヲ俟タズ第二條第
五條物品販賣價格取縮規則第一條ニ依リ
當然ニ處罰セラルヘキコト蓋シ疑ナシト
謂ハサルヘカラス然ラハ前記第七條ハ如
何ニ解スヘキカ代理人使用人其他ノ從業
者ノ行為ハ法律ノ效果ハ法人又ハ主人ニ
及フヘシト雖モ行為者ノハ飽テ代理人
人使用人從業者ノ行為ナリサレハ代理人
從業者等ハ自己ノ行為トシテ處罰ヲ受ケ
ルニ至ルハ當然ト爲スヘキ右ノ場合ニ於
テハ法人(自然人タル主人モ)ハ其ノ責

ヲ負フヘキ罰則ナリト謂フヘシ然レハ代
表者カ其機關トシテ爲シタル場合モ右ト
同様ニアラサヤトノ疑問ヲ生スヘキモ是
レ其ノ根本ノ性質ヲ異ニス蓋シ機關ハ代
理人從業者ト雖モ其ノ職務ヲ行フニ當
リ尤モ代表者ト雖モ其ノ職務ヲ行フニ當
リ法人ノ機關タル地位ヲ逸脱シ一定ノ價
格迄ハ法人ニ收メ其ノ餘ハ自己ノ所得ト
爲スカ如キ行動ニ出テタル場合ニ在リテ
ハ代理人從業者等ト同様右第七條ニ依リ
處罰ヲ受ケ猶法人モ同様ニ依リ罰セラル
ヘシト雖モ法人カ代表者タル機關ト機關
トシテノ行為ニ就キテハ第七條ニ依リコ
トヲ俟タズ第二條第五條物品販賣價格取
縮規則第一條ニ依リ違反者トシテ當然處
分ヲ受ケザルヘカラス本件上告人カ山本
長之助ニ販賣シタルハ株式會社帶谷商店
ノ行為ノミニシテ民法上ニ於テモ刑法上
ニ於テモ其ノ以外何物モ存在スルコトナシ
サレハ本件ニ於テハ上告人個人ノ行為ハ
全ク存在セザルモノト爲サザレハカラス
法人ニ對シテモ特別規定アルニアラサレ
ハ處罰シ得サルモノナリトノ前提ヲ採ル
トスルモ第二條第五條物品販賣價格取縮
規則第一條ニ所謂「者」中ニ法人モ包含
スルモノト解スル以上法律ハ法人ヲモ處
罰スルモノト規定シタルコト明カト謂フ
ヘク若シ夫レ第七條カ法人ヲ罰スルト共
ニ之カ代表者(機關トシテ爲シタル場合
ニ於テモ)個人ヲモ罰スル趣旨ナリトセ
ハ原裁判所ハ宜シク右第七條ヲ適用シ上
告人ニモ刑事責任アル故ヲ明カニセザル
ヘカラス然ラハ事茲ニ出テサリシ原判決
ハ到底理由不備ノ違法アルヲ免レズト云

辯護人山岡萬之助小田泰三上告趣意書
(大審院判決全集、第七輯(四二五))

昭和十五年九月十八日
大審院第三民事部
裁判長 津田 共之
判事 高田 貞一
判事 古川 龍一

カ「中」物ナリシコトハ長之助ノ右供述ニヨリテ之ヲ推知シ得ヘキモ後者三百反カ果シテ中物ナリシヤ否ハ長之助ノ供述セザル所ニシテ又右第二號表ノ記載セザル所ナリ去レハ原判決ノ判示スル四十番手ニ合然ボブリン中五百反アル内三百反カ果シテ「中」物ナリシヤ否ニ付テハ原判決ハ其ノ證據ヲ缺キ理由不備ノ違法アリト信ス云フニ在リ

然レドモ原審公判廷ニ於テ裁判長ガ被告ハ二讀聞ケ被告人之ヲ背シタル所論山本長之助ニ對シテ檢事取書第二項ニ依レバ山本長之助ガ被告ニシテ文書タルステール、フアイバー織物ボブリンガ四十番手ニ合然ボブリン中及三十番手單絲使用ノボブリン並ニ兩種類ナリシコト海ニ所論ノ如シ而シテ其ノ後現實ニ賣買契約成立シ被告ヨリ山本長之助ニ送付シタルモノハ所論第二號表ニ徴シ三月十四日(昭和十四年)スフ30×30ボブリン並ニ二百反及同日スフ40×40ボブリン中二百反ナルコト明白ナルガ故ニ同表ニ於ケル同年四月二十日送付ノ「スフ40×40ボブリン」三百反ハボブリン中ナルコトヲ自ラ看取シ得ベシ從テ之ニ前記「ボブリン」中二百反ヲ加フレバ被告ヨリ山本長之助ニ販賣シタル「ボブリン」ハ原判示ノ如ク五百反ナルコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

仍テ原審公判調書ヲ閱スルニ同調書中ニハ被告ノ供述トシテ「問山本トノ約定單價ハ此通りカ裁判長ハ山本長之助ニ對スル檢事取書第二項(記載第三五六以下)ヲ讀聞ケテ答其通り同調書アリマセヌ取引ノ詳細ハ此通りカ裁判長ハ記第四六丁町杉村倉庫ニ於テ受渡ラシタノテ「アリス」トアリ被告ノ原審公廷ニ於ケル供述ハ右山本長之助ニ對スル檢事取書第二項及ヒ記載第四六丁第二號表ヲ依ツニ在ラサレハ判示事實ヲ證明スルニ足ラス仍テ記載第四六丁第二號表ヲ閱スルニ同表ハ司法警察吏巡査或合正夫同巡査中山愛之助兩名ノ作成名義ニ係ル地方警視庁浮盛男宛「物品販賣價格取締違反被疑事件ニ關スル報告書」ト題スル報告書ニ添付セラレ且ツ報告書内容ヲ爲ス表ナルコト明カナリ即チ右報告書中犯罪事實ノ一乃至六ニ掲タル事項ヲ表ニ作成シタルモノナリ故ニ右第二號表ハ巡査合正夫等ノ報告書ノ内容ヲナスシテ右報告書ハ巡査合正夫等ノ意見ヲ報告シタルモノニシテ彼等ノ意見ハ表示ニ外ナラス斯ル警察官ノ意見書ハ本質上一部ヲ爲ス右第二號表モ亦犯罪ノ證據ニ適セザルモノト云ハザルヘカ原審ニ右報告書ニ證據力アリトセシカ原審ハ須ク其ノ一部ヲ第二號表ノミニ止ラズ報告書全部ニ證據力アリトシテ報告書全部ヘカラス蓋シテ第二號表ハ報告書全部ト不可分一體ヲ爲セルモノナレハナリ然レニ原判決ハ此ノ報告書ニ付キ何等證據ヲ爲シタル事蹟ノ見ルヘキモノナシ

故ニ原判決ハ夫レ自體證據ニ適セザル巡査ノ意見書ヲ證據ニ供シタルカ又ハ證據調ノ手續ヲ經テ報告書罪證ニ供シタルモノト云フヘタ而シテ前記山本長之助ニ對スル檢事取書第二項ノミヲ以テシテハ判示事實ヲ證明スルニ足ラサルカ故ニ結局原判決ハ判示事實ヲ證據ニ依リテ說示セザルモノニシテ理由不備ノ違法アリト信ス云フニ在リ

然レドモ所論第二號表ハ原判決ガ證據トシテ之ヲ引用シタルニ非ズシテ只原審ニ於テ被告ノ訊問ニ際シ便宜上同表ヲ掲記ノ本件織物販賣ニ關スル記載事項ヲ問答ニ援用シタルニ過キザラフ以テ假令同表ニ記載事項ガ原判決引用ノ被告ノ供述ノ一部ヲ爲ス本件ノ如キ場合ト雖同表ト一體ヲ爲ス所論報告書ガ刑事訴訟法ニ於ケル證據ナル證據トシ得ベキヤ否若ハ同表類ニ付證據調ノ手續アリタルヤ否ノ如キハ前記被告ノ供述ノ證據力ニ付何等消長ナキモノト云ハザルヘカ然ラバ原判決ハ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

辯護人亦非幸夫上右趣意書

第一點ハ原判決ハ其事實理由中「被告人ハ昭和十四年十二月一日辭任スルニ至ル迄綿布並ニスフ織物製造販賣業株式會社ノ業務ニ關シテ代表取締役ナリシコト右三月十四日頃ヨリ同年四月二十日頃迄ノ間前後三回ニ亘リ肩書居宅ニ於テ後記織物加工材料トシテ使用スル山本長之助ニ對シテ「フアイバー」織物四十番手使用ニ對シテ「中」物ナリシコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

第二點ハ原判決ハ其事實理由中「被告人ハ昭和十四年十二月一日辭任スルニ至ル迄綿布並ニスフ織物製造販賣業株式會社ノ業務ニ關シテ代表取締役ナリシコト右三月十四日頃ヨリ同年四月二十日頃迄ノ間前後三回ニ亘リ肩書居宅ニ於テ後記織物加工材料トシテ使用スル山本長之助ニ對シテ「フアイバー」織物四十番手使用ニ對シテ「中」物ナリシコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

【大審院判決全集】第七卷一四二七

第二點ハ原判決ハ「法令ノ適用ヲ遺脱シタル違法アリ原審判決ハ被告人ハ云々株式會社代表取締役ナリシコトヲ右會社ノ業務ニ關シ」判示スル「フアイバー」織物ヲ大阪府知事ノ指定シタル生産者最終最高販賣價格ヲ超過スル判示價格ヲ以テ販賣シタル事實ヲ認定スルモ據テ之ヲ當然輸出品等ニ關スル臨時措置ニ關スル法律第七條ヲ適用スルコトナシ右法律第七條ヲ見ルニ「法人ノ代表者(中略)カ其ノ法人(中略)ノ業務ニ關シ前條ノ違反行為ヲ爲シタルトキハ行為者ヲ罰スルノ外其ノ法人(中略)ニ對シ又前條ノ罰金刑ヲ科ス」ト規定セリ即チ法人ノ代表者タル個人ノ犯罪ノ刑罰ヲ規定シ代表者及法人ノ各別ニ處罰スル所謂ニ本建ノ刑罰規定ヲ爲シタル凡ソ一犯罪行為ニ付テハ其ノ犯人ニ對シテ「ミ刑罰ヲ科スルハ刑法ノ原則ナルヲ以テ本件被告人タリシ株式會社代表者トシテ處罰スル同時ニ其ノ代表者タル被告人ヲ處罰セントスルニハ兩罰主義ヲ規定シタル法令ヲ適用スルニ非サレハ不可能ナリ然レニ前記ノ如ク法律第七條ヲ適用セシメ直チニ法律第五條ニ開撥シタル法令ノ適用ヲ遺脱シタル違法アルモノナリト云

辯護人四方田保上右趣意書

第一點ハ原判決ハ被告人ニ對シ輸出品等ニ關スル臨時措置ニ關スル法律第三條第五條ヲ適用處罰シタル判示理由頗ル明快ヲ缺クモノアリ其前段ニ於テ被告人ノ株式會社代表者トシテ代表取締役ナリシコト其業務ニ關シテ本件行為ヲ取テシタル事實ヲ認メ乍ラ其後段ニ於テ「後記織物

加工材料トシテ使用スル山本長之助ニ對シテ「フアイバー」織物四十番手使用ニ對シテ「中」物ナリシコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

仍テ案スルニ法律第九十二條(輸出入品等ニ關スル臨時措置ニ關スル法律)第五條ニ所謂「違反シタル者」トハ違反行為者即犯罪ノ主體タル者ト云フ意味ニ外ナラザルガ故ニ犯罪行為能力者タル自然人ヲ指稱シ法人ヲ包含セザルモノト解スルヲ正當トス蓋シ我法制ニ於テ犯罪ノ主體タルモノハ自然人ノミニシテ法人ハ犯罪能力ヲ有セザルコトヲ以テ原則トスル事ハ本院判例(本院明治三十六年(刑)第一三三〇號同年七月三日宣告昭和五年(刑)第六三三號同年六月二十五日判決參照)ノ說示スルコトコトニシテ法律令中法人處罰ノ規定存スルコトアリト雖其ノ處罰ハ法人ノ犯罪能力ヲ認メタルニ非ズシテ法人ト犯罪行為ヲ爲シタル自人トカ法定ノ特殊關係ニ立ツ場合ニ限リ行政處分若ハ保安處分ノ意味ニ於テ法人ニ其ノ制裁ヲ及スト云フニ過キザレバ

ナリ從ツテ同法律第七條ニ於ケル所謂「法人」又ハ「個人」之等ヲ犯罪行為者トシテ處罰スルニ非ズシテ只違反行為者(犯罪行為者)トノ間ニ同條所定ノ特殊關係アルノ故ヲ以テ之ニ制裁ヲ及ス旨ノ所謂「法人」又ハ「個人」ニ對スル特別處罰規定ナリト解スベク所謂法人ノ代表取締役等ガ法人ノ機關トシテ爲シタル犯罪ニ關スル罰則ニ非ザルヤ勿論ナリ然レニ原判決ニ依レバ被告人ハ原判示ノ如ク原判示會社代表取締役在任中同會社ノ業務ニ關シ代表取締役ニシテ「フアイバー」織物四十番手使用ニ對シテ「中」物ナリシコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

辯護人島田武夫上右趣意書

第四點ハ原判決ハ理由不備ノ違法アリ原判決ハ其ノ理由ニ於テ被告人ハ山本長之助ニ對シ昭和十四年三月十四日頃ヨリ同年四月二十四日頃迄ノ間前後三回ニ亘リ「フアイバー」織物四十番手使用ニ對シテ「中」物ナリシコトヲ認ムルニ足ル然ラバ原判決ニハ證據說示上何等缺タルトコトナシ理由不備等所論ノ如キ違法アルコトナシ論旨山ナシ

第二項ヲ讀聞ケテ答其通り同調書アリマセヌ取引ノ詳細ハ此通りカ裁判長ハ記載第四六丁第三號表ヲ讀ケテ答其通り東區安土町杉村倉庫ニ於テ受渡ラシタル「アリス」トアリ被告ノ原審公廷ニ於ケル供述ハ右山本長之助ニ對スル檢事取書第二項及ヒ記載第四六丁第二號表ヲ依ツニ在ラサレハ判示事實ヲ證明スルニ足ラス仍テ記載第四六丁第二號表ヲ閱スルニ同表ハ司法警察吏巡査或合正夫同巡査中山愛之助兩名ノ作成名義ニ係ル地方警視庁浮盛男宛「物品販賣價格取締違反被疑事件ニ關スル報告書」ト題スル報告書ニ添付セラレ且ツ報告書内容ヲ爲ス表ナルコト明カナリ即チ右報告書中犯罪事實ノ一乃至六ニ掲タル事項ヲ表ニ作成シタルモノナリ故ニ右第二號表ハ巡査合正夫等ノ報告書ノ内容ヲナスシテ右報告書ハ巡査合正夫等ノ意見ヲ報告シタルモノニシテ彼等ノ意見ハ表示ニ外ナラス斯ル警察官ノ意見書ハ本質上一部ヲ爲ス右第二號表モ亦犯罪ノ證據ニ適セザルモノト云ハザルヘカ原審ニ右報告書ニ證據力アリトセシカ原審ハ須ク其ノ一部ヲ第二號表ノミニ止ラズ報告書全部ニ證據力アリトシテ報告書全部ヘカラス蓋シテ第二號表ハ報告書全部ト不可分一體ヲ爲セルモノナレハナリ然レニ原判決ハ此ノ報告書ニ付キ何等證據ヲ爲シタル事蹟ノ見ルヘキモノナシ

【大審院判決全集】第七卷一四二六

臨時措置法第五條ニ所屬違反シタル者ニハ法人ヲ含マセカ

(中略)大阪府知事ノ指定シタル生産者... 被告ノ行為ハ...

地位ハ勿論其他關係セル一切ノ公私ノ... 被告ノ行為ハ...

販賣シタルトノ御疑ヲ受ケタルモ喜... 被告ノ行為ハ...

セラレタル厚意ヲ感謝シタル上私儀度此... 被告ノ行為ハ...

ニ控訴權ヲ放棄致候同公判廷ノ傍聴席ヲ... 被告ノ行為ハ...

御察察ニ想ヘ申候何卒命短キ此ノ情レ... 被告ノ行為ハ...

超過分ニ付テハ後ニ至リ買主山本長之助... 被告ノ行為ハ...

シテ山本長之助ヨリ暴利ヲ得タルノ目... 被告ノ行為ハ...

臨時措置法第五條ニ所屬違反シタル者ニハ法人ヲ含マセカ

大審院判決全集 第七輯一四二九

ト引換フルコトナク販賣スルニ至ラシメ
因テ右吉岡源治等ノ綿絲無票販賣ノ犯行
ヲ容易ナラシメタル行爲(第一審判決第
一ノ二事實)ニ付キテモ審判ヲ求ムル旨
ノ記載アリ然ルニ原判決ハ右事實ニ付何
等ノ裁判ヲ爲スコトナカリシハ即チ請求
ヲ受ケタル事件ニ付キ審判ヲ爲ササル違
法アルモノニシテ此點ニ於テ破毀ヲ免レ
サルモノト信スト云フニ在リ
然レドモ本件記録ニ依レバ所論起訴狀
(公判請求書)ニ記載セラレ原審ニ懸屬
シタル犯罪事實(第一審判決第一(一)事
實)ハ原審公廷ニ於テ審理セラレ原判決
ハ其ノ一部ヲ無罪ナリトシ(西座孝經ノ
手ノ經テ神農忠治ヲシテ上野四郎一郎ニ賣
却セシメタル部分)其ノ他ハ原判決第一
(二)イ(三)イロ(四)乃至(六)ニ
於テ犯罪事實ヲ確定シ他ノ犯罪ト共ニ擬
律ノ上刑ノ官渡ヲ爲シタルコト明ナルヲ
以テ原判決ニハ所論ノ如キ違法ナク論旨
理由ナシ

第三點原判決ヲ見ルニ其第一ノ(一)事
實トシテ「被告人年信ハ昭和十三年十一
月上旬兵庫縣多可郡西脇町ニ於テ相被告
人茂市ニ對シ綿絲半捆ヲ其輸出品又ハ
輸出品ノ原料若クハ材料ニ非サル物ノ製
造ニ使用ノ爲メ綿絲原料又ハ材料トス
ル製品ノ製造ヲ業トスル者ニ對シ割當票
ト引換ニ非スシテ轉賣セラルルモノナル
ノ情ヲ知り乍ラ代金百四十五圓ニテ賣渡
シ因テ右相被告人ヲシテ其頃同縣加東郡
龍野町ニ於テ綿絲原料又ハ材料トシテ
使用スルノミテ紐製造業長谷部貞義ニ對
シ右綿絲原料又ハ輸出品ノ原料若
クハ材料ニ非ル物ノ製造ニ使用セラル
モノナルノ情ヲ知りナカラ割當票ト引換

セズ而シテ原判決示ノ如キ事實ナルニ於テ
ハ假令被告人ニ於テ被告ガ本件綿絲
ヲ内橋年信ニ賣却シタル以後ニ於ケル原
判決示ノ如キ具體的事實ヲ認識セザリシト
スルモ清水敏一郎ノ犯行ヲ補助シタルモ
ノ即從犯トシテ處罰ヲ免レ得ベキモノニ
非ザルヲ以テ論旨執レモ其ノ理由ナシ
被告人内橋年信辯護人中井一夫赤井幸夫
上告陳意書
第一點原判決ハ其事實理由第一ノ(一)
ニ於テ「被告人年信ハ昭和十三年十二
月下旬昭和十四年二月中旬迄ノ間西脇
町ニ於テ三澤藤吉等ニ對シ綿絲合計二
十捆ヲ其輸出品又ハ輸出品ノ原料若クハ
材料ニ非サル物ノ製造ニ使用ノ爲メ綿絲
原料又ハ材料トスル製品ノ製造ヲ業ト
スル者ニ對シ割當票ト引換ニ非スシテ轉
賣セラルルモノナルノ情ヲ知り乍ラ代金
合計一萬千六百圓ニテ賣渡シ同人等ヨリ
更ニ之ヲ轉賣セ難松岡(イ)榎本喜雄
村藤吉(中略)小倉逸作並ニ池田幸吉ニ
對シ割當票ト引換ニ非スシテ代金合計六
千五百五十圓ニテ販賣スルニ至ラシメ
(ロ)松岡(イ)榎本喜雄等ニ對シ
右綿絲ノ内五捆ヲ割當票ト引換ニ非スシ
テ代金合計三千圓ニテ販賣スルニ至ラシ
メ(ハ)鈴木雷蔵ヲシテ伊藤宇平ニ對シ
右綿絲ノ内三捆ヲ割當票ト引換ニ非スシ
テ代金合計千八百九十圓ニテ販賣スルニ
至ラシメ(ニ)中村藤吉ヲシテ高峰牧治
郎ニ對シ右綿絲ノ内一捆ヲ割當票ト引換
ニ非スシテ代金六百八十圓ニテ販賣スル
ニ至ラシメ以テ右榎本、松岡、鈴木、中
村ノ各綿絲無票販賣ノ犯行ヲ容易ナラシ
メタル之レヲ補助シト判示シタル然レド

モ第一右判示スルカ如ク本件ノ正犯ハ榎
本喜雄、松岡(イ)、鈴木雷蔵及中村藤吉
ニシテ此ノ正犯ヲ補助シタル者ハ同人等
ニ對シ判示綿絲販賣シタル三澤藤吉ナ
リトス而シテ上告人ハ此ノ三澤藤吉等ニ
對シ本件綿絲販賣シタルニ過キス即
チ上告人ノ判示綿絲販賣行爲ト榎本喜
雄等ノ販賣行爲ト中間ニハ責任能力者
タル三澤藤吉等ノ行爲カ介在スル次第ナ
ルヲ以テ假令上告人ハ判示ノ如ク其綿
絲力無票ニテ綿絲使用業者ニ賣渡サレル
事實ヲ認識シタルトスルモ其ノ因果關係
ハ三澤藤吉等ノ行爲ヨリテ中斷サルル
ヲ以テ犯罪構成スルコト之レナキモノ
ト謂ハサルハカラス刑法第六十一條第二
項ニ於テハ教唆者ヲ教唆シタル者亦教唆
者トシテ處斷スヘキ旨同第六十二條第二
項ニ於テハ從犯ヲ教唆シタルモノハ從犯
ニ準ズヘキ旨特ニ規定スルニ拘ハラズ從
犯ヲ補助シタル者ニ付キ規定スル處ナキ
ハ之レ明ニ補助者ヲ補助スル者即チ所謂
間接補助ハ之ヲ謂セサルノ趣旨ナルコト
ヲ明示スルモノト謂フヘキナリ第二假令
ニ所謂間接補助亦補助罪ヲ構成スヘキモ
ノナリトスルモ從犯ハ正犯ノ行爲ヲ認識
シ而モ之レヲ容易ナラシムル意思ヲ以テ
爲シタル場合ニ於テ始メテ成立シ其ノ正
犯ノ行爲ニ付キ何等認識ヲ有セサル場合
ニ於テハ其成立ヲ見ルコト之レナキモノ
ナリトス而シテ原判決事實並ニ證據理由
ヲ見ルニ上告人ニ於テハ判示三澤藤吉等
カ判示綿絲販賣ニ榎本喜雄、松岡(イ)、
鈴木雷蔵及中村藤吉ニ轉賣シ更ニ右榎本
喜雄等カ夫々小倉逸作並ニ池田幸吉、中
村治雄等伊藤宇平及高峰牧治郎ニ賣却ス
ル事實ヲ認識シタルコトヲ認ムヘキモノ

ナシ而シテ認識ナキ處ニ故意犯ノ成立ヲ
認ムヘカラサルコト茲ニ多言ヲ要セサル
處ナリトス以上執レテ點ヨリ見ルモ原判
決ハ違法ニシテ破毀ヲ免レサルモノト信
ス(原判決認定第二事實ニ付キテモ同様
ノ違法アリ)ト云フニ在リ
然レドモ原判決第一(二)ハ被告人カ榎
本喜雄、松岡(イ)、鈴木雷蔵及中村藤
吉等ノ犯行ヲ補助シタルコトヲ確定シタ
ルニ止リ所論ノ如ク三澤藤吉ガ右榎本喜
雄等ノ犯行ヲ補助シタル事實ヲ認メタル
モノニ非ズ而シテ原判決示ノ如クナルニ於
テハ假令被告人ニ於テ被告ガ本件物品
ヲ三澤藤吉等ニ賣却シタル後ニ於ケル原
判決示ノ如キ具體的事實ヲ認識セザリシト
スルモ右榎本喜雄等ノ犯行ニ付從犯トシ
テ其ノ責ヲ免レ得ベキモノニ非ザルコト
勿論ニシテ原判決第二事實ニ付テモ被告上
說明ト同一趣旨ノ理由ニ依リ原判決ニハ
所論ノ如キ違法ナキモノト謂フヲ得ベク
論旨理由ナシ
第二點本件起訴狀ヲ見ルニ「被告人内橋
年信ハ昭和十四年二月中旬ヨリ同年三月
月上旬ニ至ル迄ノ間多可郡西脇町ニ於テ神
戶市文房具商吉岡源治外三名カ直接又ハ
他人ノ手ヲ經テ輸出品又ハ輸出品ノ原料
若クハ材料ノ製造又ハ加工ノ爲メニアラ
スシテ國內用品ノ製造加工ニ使用スルモ
ノ割當票ト引換フルコトナク内地向工
業者ニ販賣スルモノナルコトヲ情ヲ知り
ナカラ純綿絲四十六捆ヲ代金二萬五千圓
百八十五圓ニテ同人等ニ賣却シ同人等
シテ之レヲ更ニ直接又ハ他人ノ手ヲ經テ
大阪府内地向業者名倉藤三郎外數名ノ
内地向業者ニ國內用品ノ製造加工ニ使
用サルモノナル事情ヲ知悉ノ上割當票

西座乃至中野ノ行爲ニ就テモ上告人ノ認
識ヲ缺キタルハ同斷ナリ即チ事實ニ於テ
中野ノ最終販賣者タル點ヲ認示判示正
犯者ノ行爲ノ認識全クナカリシ點等ヲ原
判決ハ其ノ判示ノ如ク認定之ヲ誤リタル
次第ナリト云ヒ
第三點原判決ハ上告申立人ニ故意ナキ
ニ拘ラス之アルカ如ク事實ヲ誤認シタル
原判決ハ其ノ理由ニ於テ「被告人ハ内橋
ニ純綿絲一捆ニ付四百七十圓ニテ賣却シ
タルカ其ノ價格ノ高カリシ點ヨリ推シテ
更ニ轉賣セラレ結局内地向製品用トシテ
無票工業業者ニ販賣スルモノト思ヒタ
リ」トノ趣旨ヲ記載セリ即チ價格カ高カ
リシヨリ内地向ニ流サルモノト情知シ
タリト云フモノナルカ之ハ原審第五回公
判ニ於テ「被告人ハ内橋カ自己ノ工場ヲ
使用スル輸出向ノ不足綿ヲ補フ爲メ同人
ノ同意ヨリ求メニ依リ賣渡シタル」トノ
上告人ノ自供ニ徴シテ之ヲ推知スルコト
得共ノ點原審ニ於テ相被告人内橋トノ對
質ノ訊問ノ形トナリモ之ハ記憶セストノ
趣旨ヲ述ヘタルモノハ所謂リシテ制ノ原
料綿タル事情モアリテ進シテ不足云々
ヲ内橋ハ答辯シ兼ネタルモノト推定スル
ニ難カラス不足品ヲ補フ場合合ノ如キ價
格ヲ以テ買入ルル事案モ不自然ナラサル
次第ナリト云フニ在リ
然レドモ所論原判示事實ハ其ノ舉示スル
證據ヲ綜合考察スルトキハ優ニ之ヲ認ム
ルニ足リ此ノ點ニ關スル所論ハ畢竟獨自
ノ見解ニ基キ原審ノ專權ニ屬スル證據ノ
取捨判斷ヲ論難シ延イテ事實認定ヲ攻擊
スルモノニシテ證據ヲ精査スルモ原判決
ニ所論ノ如キ重大ナル事實ノ誤認アルコ
トヲ疑フニ足ルベキ顯著ナル事由ヲ發見

ニ非スシテ代金百四十圓ニテ販賣スルニ
至ラシメ以テ右相被告人ノ綿絲無票販賣
ノ犯行ヲ容易ナラシメタル之レヲ補助シタ
ル旨判示シタル然レドモ本件起訴狀(尙
第一審判決認定事實)ヲ見ルニ此ノ事實
第一審判決認定事實ヲ見ルニ此ノ事實
ニ付キ公訴ヲ提起スル旨ノ記載ナシ而シ
テ原審判決法律理由ヲ見ルニ該事實ハ他
ノ起訴アリタル事實ト併合罪ノ關係ニ在
ルモノト認メラレタルコト明ナリトス果
シテ然ラハ原判決ハ訴ヲ受ケタル事件ニ
付キ判決ヲ爲シタル違法アルモノナリト
云フニ在リ
然レドモ本件記録ヲ調査スルニ所論原判
示事實ハ公判請求書第一(一)第一審判
決判示第一(一)記載ノ事實ニ包含セラ
ルルモノト解シ得ルガ故ニ論旨採用ノ限
ニ非ズ
第四點原審公判請求書ヲ見ルニ公判廷ニ於
テ裁判長ハ被告人ニ對シ第一審判決認
定第一ノ(三)原判決第一ノ(七)ニ當
ル記載第一六四二丁)第一ノ(二)(原判
決ハ之レニ付キ何等ノ判斷ヲ爲サズ記載
第一六四三丁)及第二(原判決第二事實
記載第一六四六丁)ニ付キ刑事訴訟法第
三百四十五條第二ノ規定ニ依リ事實ノ訊
問ヲ爲シタルニ止マリ其他ノ原判決事實
理由判示ノ事實ニ付キ訊問ヲ爲スコトナ
カリシモノナリ果シテ然ラハ原審ノ事實
ノ審理ハ違法ナルヲ以テ原判決ハ此點ニ
於テ破毀ヲ免レサルモノト信スト云フニ
在リ
然レドモ原判決ガ所論第一審判決判示第
一(二)事實ニ付判斷ヲ下シタルコトハ
第二點ニ於テ説明シタルカ如クニシテ原
審公判請求書ニ依レバ所論事實ニ付刑事訴
訟法第三百四十五條第二項ニ基キ訊問ヲ

爲シ違法ニ證據ヲ手續ヲ了シタルコト
ヲ看取シ得ベク而シテ原審ハ職權ノ行使
ニ依リ證據ヲ取捨判斷ヲ爲シ原判示ノ如
キ事實認定ヲ爲シタルモノナレバ原判示
事實ニ付一々之ガ訊問ヲ爲サザレバトテ
違法ヲ以テ目スベキニ非ズ論旨理由ナシ
第六點上告人ニ對シ假令判示犯罪罪ヲ認
ムヘキモノナリトスルモ之レ全ク法ノ不
知ニ基クモノニシテ其情極メテ恕スヘキ
モノナリ而モ犯後改悔ノ情亦顯著ナルモ
ノアルヲ以テ之レニ對シ懲役四月ノ重刑
ヲ科シタル原判決ハ其量刑過重ノ違法ヲ
ルモノナリト信スト云フニ在リ
然レドモ記載ヲ精査シ犯情其ノ他諸般ノ
情狀ヲ參酌考察スルモ原判決ノ被告人ニ
對スル量刑ヲ甚シク不當ナリト思料スベ
キ顯著ナル事由ヲ發見セザルガ故ニ本論
旨モ亦其ノ理由ナキモノト謂フベシ
茲上說明ノ如クナルニ依リ刑事訴訟法第
四百四十六條ニ則リ主文ノ如ク判決ス
昭和十五年十月十九日
大審院第三刑事部
裁判長 豐水 道
列事 神原 善造
列事 小井 四郎
列事 十川 寬之助
列事 安齋 保

百三十六番 山下其昌地方
店員(元新布販賣部)
高橋 重雄
明治十四年九月二十九日
右輸出入品等ニ關スル臨時措置ニ關スル
法律違反被告事件ニ付昭和十五年七月二
十三日大阪地方裁判所ニ於テ言渡シタル
第二審判決ニ對シ被告人ハ上告ヲ爲シタ
リ因テ判決スルコト左ノ如シ
本件上告ハ之ヲ棄却ス
【理 由】
辯護人三木通三清淵一郎北村金太郎上告
趣意書第一點原判決ハ犯罪ノ形態ニ關ス
ル事實ヲ誤認シタルト認ムヘキ顯著ナル
事由アル違法ノ判決ナリ原審ニ於テ被告
ノ争ヒタル主要ノ點ハ被告ハ織物卸賣ヲ
業トスル者ニハアラズシテ單ニ一定ノ口
錢ヲ貰ヒ受ケ織物賣買ノ仲介ヲ爲ス者
(所謂ブローカー)ニ過キス本件ノ各行
爲モ亦賣主ト買主トノ間ノ仲介ヲ爲シ幾
何カノ手数料ヲ得タルニ過キスト言フニ
在リ果シテ被告ノ業態カ右ノ如クニシテ
本件ノ取引モ亦此ノ業態ノ一部ヲ組成ス
ルモノナリトスレバ此ハ法律ノ適用ニ
重大ナル關係アリ綿絲布ノ轉賣規則ハ無
許可ノ綿絲布ヲ卸賣スルコトヲ禁止スル
趣旨ナルヲ以テ若シ被告ノ辯明ハ其業
態ノ業態カ單ニ仲介業ニ止マラハ其賣
卸賣ヲ爲シタル者ハ他ニ別ニ存在シ仲介
者ノ如キハ此ノ卸賣行爲ヲ補助シタルニ
過キスト云フコトト爲ル補助者ニ對シテ
ハ刑法第六十三條ニ於テ正犯ノ刑ヨリモ
減刑セラルルノ法則アリ故ニ前記被告ノ
業態ニ關スル事實ハ判決主文ニ重大ナル
影響ヲ有ス原判決ハ被告ノ此ノ辯明ヲ
斥ケル爲メ第一審第一回公判調書及檢事

〔大審院判決集〕 第七輯一四三六

○統制違反ノ取引事實
ノ審理方並ニ判示方

昭和十五年(九)第九七〇號
本審 兵庫縣警署會左村警署千七百
六十三番地
住居 大阪市此花區上島島南二丁目三

〔大審院判決集〕 第七輯一四三七

同第二點原裁判所ノ審理ニハ被告事件ニ
關シ被告ヲシテ十分ナル陳述ヲ爲サシ
メス乃チ未ダ審理ヲ盡ササルノ違法アリ
曾テ判院ニ於テハ連續犯罪ニ於テハ刑事
訴訟法第三百六十條ニ所謂罪ノ爲レキ
事實ヲ表示スルニ當リ各個ノ罪ノ爲レキ
ヲ一々具體的ニ判示セサルモ數多ノ行爲
ニ共通セル犯罪ノ手段方法其ノ他ノ事實
ヲ具體的ニ判示シ連續シタル行爲ノ始期
終期ヲ明カニ示シ且ツ財產上ノ犯罪ニシテ
被害者又ハ贓物ニ異同アルトキハ被害者
中或ル者ノ氏名ヲ表示スル外ハ其ノ員數
又ハ贓額ヲ表示スルハ可ナリト判例ヲ
示サレタリ(昭和七年三月十四日)爾來
全國ノ裁判所ハ連續犯罪事件ニ付テハ概
ネ此ノ基準ヲ以テ判決書ヲ作成スルコト
例トス然レトモ右ハ單ニ判決書作成ノ便
法ヲ示サレタルニ過キス之カ爲メ審理ノ
方法ヲ之ニ準シテ可ナリトノ趣旨ニテ
サルヘシ元來連續犯罪ナルモノハ縱令連
續シタリトハ言ヘ本來數個ノ行爲ニシテ
唯同一ノ罪名ニ觸ルルカ故ニ法律ノ擬制
ニ依リ一罪トシテ處斷セラルルニ過キス
(刑法第五十五條)刑事訴訟法第三百三
三條以下並ニ第三百三十八條以下ニ依リ
被告人ニ對シ訊問ヲ爲スニ當ツテハ起訴
セラレタル各個ノ事實ノ内容ヲ被告ニ告
ケ被告ヲシテ之ニ關スル陳述ヲ爲スノ機
會ヲ得セシメサルヘカラス本件審理ノ經
過ヲ見ルニ檢事ハ第一審判決書記載ノ通
リノ被告事件ノ陳述ヲ爲シ裁判長ハ之ニ
關スル事實ノ認否ヲ確メタルノミナリ第
一審判決ノ方式ハ前記引用ノ判例例ノ
趣旨ニ從ヒ綿布商成源與一外七名ニ對シ
國內向綿織物葛城何反綿コロ何反朱子
何反平織何反米綾何反反合計四萬八千八

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

所地タル大阪市北區藤田町五十五番地ノ
路次ニ一家ヲ借り此處ニ就眠スルノミナ
リ妻子ナク使用人ナク飲食炊事ノ設備サ
ヘモ調ヘス朝ニ出テ市中ヲ周リ夕ニ歸
リテ就眠スルノミナリ固ヨリ綿織物ノ開
屋營業ヲ爲スト言フカ如キ設備ヲ有スル
ニアラス唯第一審公判調書ニハ「成源與
一外八名ニ對シ國內向綿織物葛城以下ヲ
代金合計六萬二千二百四十五錢ニ卸販
賣シタルコトハ相違ナイカ」トノ問ニ對
シ被告ハ「ソノ通り相違アリマセム」ト
答ヘタリト雖モ此ノ問ニ答トノ問ニハ
一ノ法律問題介在セリ判事ハ昭和十三年
商工省令第三十九號ニ綿織物ハ小賣ヲ除
キ商工大臣指定以外ノ者ニ對シ之ヲ販賣
スルコトヲ得スト在ルヲ以テ此ノ法規ヲ
眼中ニ置キ小賣ニアラス販賣即チ卸販
賣ヲ爲シタル場合ニアラスヤトノ問ヲ設
ケタルモノナランモ右商工省令ニ於ケル
「販賣」乃至「小賣」ニテハ「販賣」ノ
意義ニ付テハ民間ニ於テ總テノ者カ明確
ナル認識ヲ有スルニ限ラス斯ノ如キ法律
上特殊ノ用語ヲ舉ケ來リテ認否ヲ被告
ニ求ムルカ如キハ其ノ眞相ヲ穿ツ所以ニ
アラスニ此ノ對シ被告カ「相違アリマセム」
ト答ヘタリト雖モ此ノ問ニ答トノ問ニハ
被告ノ業態カブローカーナリト官コト
ヨリ進ミ來リ裁判官モ亦一應被告ノ業態
ヲブローカーナルコトヲ承認シブローカ
ーヲシテ幾ラ位收入アリヤ等ノ問ヲ發シ
居ルヨリ見レハ被告ハ卸販賣ナル文字ニ
ハ特殊ノ注意ヲ拂ハス自ラノ立場カブ
ローカーナルモ他人カ成源與一外八名ニ販
賣シタル事實ハ存スルヲ以テ此ノ販賣ヲ
指スコトト考ヘ其ノ通り相違ナシト答ヘ
タルモノト解セサルヘカラス斯レ證據ヲ

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

以テ被告ノ爲シタルコトカ卸販賣業務ナリ
ト解スルハ重大ナル誤解ナリト官ハサル
ヘカラス次ニ原裁判所カ引用シタル檢事
廳取書ノ部分ヲ其儘ニ抄録スレハ次ノ如
シ「此ノ際私ノ業態ヲ申上ケマスカ取次
販賣業者ヲアツテ甲カラ綿布ヲ二十八圓
テ買ヒ夫レヲ乙ニ二十九圓テ賣リ差引一
圓口錢ヲ儲ケルノテアリマス無許可品ハ
スヘテ現金取引トナツテ其ノテ甲カラ
直接ニ乙方ヘ品物ヲ送ツテ賣ヒアルトキ
ハ私カ集金シ其ノ内カラ口錢ヲ差引イタ
モノヲ支拂フコトモアレハ都合ニヨツテ
甲カラ直接乙ニ集金シテ賣フテ其ノ内カ
ラ口錢ヲ貰ヒ受ケルコトモアリマス私カ
甲カラ買受ケテ乙ニ對スル賣主ハ私テア
ルコトハ相違アリマセン」此ノ記事ノ終
リニ於テモ私カ甲カラ買受ケテ乙ニ對スル
賣主ハ私テアルコトハ相違アリマセント
附言スルモ斯ノ如キハ一ノ法律ノ解釋ニ
シテ裁判ヲ爲スニ當ツテハ斯ノ如キ被告
ノ解釋ニ盲從スヘキニアラス事實ノ眞相
ノ何レニ在ルカハ其ノ前文ニ於テ右解釋
ノ基礎タル事實トシテ被告ノ述フル所ニ
基カサルヘカラス之ニ依レハ品物ハ之ヲ
所有シ居リタル甲ヨリ之ヲ需要スル乙ニ
直接持參スルモノニシテ其間被告ノ占有
ト爲ルコトナシ代金ハ或ル場合ニハ被告
カ集金シ其ノ内ヨリ口錢ヲ貰フコトモア
レハ又賣主タル甲カ直接需要家乙ヨリ集
金シテ其ノ内ヨリ口錢ヲ貰ヒ受ケルコト
モ在リ其ノ後ノ如キ場合ハ受ケタル場
合ナリ即チ檢事ノ聽取書自體ニ依ルモ被
告ノ行為カ卸販賣業者ノ行為ナリト解スヘ
キ趣旨ノモノニアラス原判決自體ノ引用
スルコトコトニ依ルモ亦以上ノ如シ況ンヤ

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

第一審公判調書全部ヲ讀讀スルトキハ被
告人ノ行為カ仲介業者ノ行為ナルコト實
ニ明白ナリ尙ホ原判決ニハ引用セサルモ
昭和十四年九月二十四日ノ司法警察官
國藤藏作成ノ聽取書中第九項ニ依ルモ
「取引ハ唯見本タケテアリマシテ現物ハ
取扱ハス先方同士直接取引シテ居リマス
金モ私ノ仕入先ノ賣店カラ集金シタ分
アリマス」ト記載セリ警察ニ於テハ被告
ヲ以テ賣主トシテノ罪案ヲ作成スル方針
ヲ以テ記錄ノ作成ニ從事セラレタルモノ
ナルヘキモ而モ猶ホ斯ノ如キ記事アリ以
テ本件ノ眞相ヲ窺フニ足ル要スルニ原判
決ハ被告ノ行為ノ態様ニ關スル認定ヲ誤
リタリト認メラルヘキ顯著ナル事由ヲ在
スルヲ以テ何卒原判決ヲ破毀セラレ事實
ニ匹敵スル御裁判ヲ行フコト希望ニ堪
スト云フニ在レトモ被告人カ綿布販賣業
ヲ營ミ居リタルモノニシテ判示物件ヲ判
示ノ者等ニ對シ卸販賣シタル原判示事實
ハ原判決ノ援引スル證據ニ依リテ證明
十分ニシテ尙モ自己ノ計算ニ於テ綿布ノ
賣買ヲ爲スヲ業トスルニ於テハ其ノ營業
施設ノ有無ニ拘ラス其ノ者カ綿布販賣業
ヲ營ム者ナリト謂フニ妨ナク原判決援引
ニ係ル所論第一審公判調書及檢事廳取書
各記載被告ノ供述ニ據ルニ出ツル
モノト解スヘキ原審カ之等證據ニヨリ被
告人ノ營業態様並判示販賣事實ヲ認シタ
ルハ何等失當ナシトス而シテ原判示事實
ハ記錄ヲ調査スルモ重大ナル誤認アルコ
トヲ疑フニ足ルヘキ顯著ナル事由ナク單
ニ賣買ノ仲介ヲ爲シ一定ノ口錢ヲ得ル者
ニ過キストスル事實ハ之ヲ認ムルヲ得ス
從犯ヲ以テ目スヘシトスル所論ノ失當ナ
ルコト亦明ナリト論旨理由ナシ

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

ラ爲シタル記事アレトモ原判決ハ右檢事
廳取書四項乃至十五項ハ證據ト爲ササル
カ故ニ之ヲ以テ以上ノ缺點ヲ補フニ足ラ
ス原判決ハ尙ホ此ノ外ニ檢事廳取書ノ一
部ヲ摘記スレトモ右ハ被告カ本件ノ行爲
ハヤハリ賣買行爲ナルコトヲ認メタル
趣旨ニテ引用セラレタルニ過キス葛城コ
ロ以下ノ具體的ノ賣買アリシコトヲ
證スルニ足ラス尙ホ茲ニ不可解ナルハ原
判決ハ被告カ販賣シタルモノノ一トシテ
廣巾コロール天(糸十六番手使用)十六反
コロール天ヲ販賣シタルノ記事アル事ナシ
第一、二審ヲ通シ被告ノ販賣シタルモノ
ニ付テハ之ヲコロールトナリト官ヒコロール
ナリト官ハスコロールハコロールト異リ未
タ起毛セサル織物ナルヲ以テコロール販
賣シタル供述記載ヲ以テコロール天販賣
證據ト爲スヘカラス刑事訴訟法ノ規定ハ
證據ト爲スヘカラス保障ナルヲ以テ濫リ
人權ノ爲メ重要ナル保障ナルヲ以テ濫リ
ニ之ヲ緩クスルコトキハ其ノ弊害ノ及フト
コロールヘカラス原判決ノ如キハ宜シク
之ヲ破毀セラレ法律遵守ノ司法精神ヲ確
立セラルヘキモノナリト思考スト云フニ
在レトモ原判決ノ援引シタル原審公判調
書コロール天平織五枚朱子販賣ノ事實ヲ知
ニ足リ而テ原判決示シテ證據ヲ綜合シ判
示販賣事實ヲ認定スルニ十分ナルコト既
ニ說明シタルカ如シ尙「廣巾コロール天」
ハ「廣巾コロール」トスルヲ可ナリトスヘ
キモ「コロール」ハ「コロール」ノ一種ナ
ルコト原審公判調書ニ明ナレハ之ヲ「コ
ロール」ト表示シタルハトテ必スシモ失
當ナリト爲スヘキニ非ス論旨理由ナシ
同第四點原判決ハ刑ノ量定過重ナリト認

聽取書ノ一部ヲ採用セラレタリ然レニ此
ノ二ツノ證據ヲ見ルモ必スシモ被告ノ辯
明ヲ斥ケルニ足ルモノニ非ス先ツ原審第
一回公判調書ヲ見ルニ判事ノ被告ニ對ス
ル綿布賣買業ハ何日カラシテ居ルノコト
ノ問ニ對シ被告ハ次ノ如ク答ヘタリ「昭
和十三年十二月カラテアリマス夫レ迄ハ
大阪市北區富田町ノ伊藤洋服店ニ店員ヲ
勤メテオリマシタカ同年十一月ニ退店シ
マシタソシテ綿織品ノ販賣業ヲ獨立シテ
開業スルツモリテアリマシタカ資本カ少
ク開業工合カ悪カツタノテ斷念シマシタ
ソシテ同年十二月カラ綿布ノブローカー
ヲ始メテテアリマス」即チ被告ハ伊藤
洋服店退店以後一旦ハ獨立シテ綿織品ノ
販賣業ヲ開業セント欲シタルモ十分ノ資
力ナキ爲メ之ヲ開業セズ昭和十三年十二
月ヨリ綿布ブローカーヲ始メタルモノナル
旨ヲ述ヘタリ尙ホ其後ニ於テモ判事ノ
「綿布ブローカーヲシテ幾ラ位ノ收入カ
アルカ」トノ問ニ對シ漸ク生活スル位ノ
モノテアリマスト答ヘ之ニ引續イテ「尤
モ本件ノ檢舉ヲ受ケテカラハ綿布ブロー
カーヲ止メマシテ作業服屋ニ雇ハレテ店
員勤ラシテ生活シテ居リマシタ答ヘ本件
ノ取引カ綿布ブローカーノ仕事ナリシコ
トヲ供述シ居ルナリ更ニ又犯罪ノ動機ニ
關スル判事ノ問ニ對シテモ「ブローカー
許可證物等ヲ扱フツモリテブローカーヲ
始メタルテスカ思ハシクナイノテ違反取
引ヲスルヤウニナリマシタ」ト在リ其ノ
業態ハブローカーナルコトニ一貫セリ尙
ホ被告ノ營業施設カ綿布卸賣問屋ノ體裁
ヲ爲セルヤヲ檢スルニ被告ノ身上ニ關シ
テハ妻子カアルコトノ問ニ對シテハ「ア
リマセム」ト答ヘタリ實際ハ其ノ肩書住

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

百五十二圓四十五錢ニテ卸販賣シタル
モノニシテ右ハ犯意連續ニ繫ルモノナリ
ト官フニ在リ一ノ犯罪構成要件ヲ明示
セズ原審カ此ノ判決摘示ニ付被告ノ陳述
ヲ未ダ採ラレタル結果原審公判調書ニ於
テハ成源與一以外七名カ何人ナリシヤト
ノ内ノ何某ニ對シテカ何人ナリシヤト
官フカ如キ具體的犯罪事實カ調査セラレ
タル形跡ナシ尤モ記錄一四七丁ニ於テハ
裁判長ハ犯罪表(五及六丁)ヲ示ス答知
ツテ居リマスソレニ書イテアルノハ其ノ
通り間違ヒアリマセム問年月日品名數量
單價販賣先買入先其ノ單價等間違ナイカ
答問違アリマセム其ノ表ノ通りテアリマ
ストノ問答ノ記載アリ然レトモ之ヲ以テ
シテハ未ダ各個ノ行爲ヲ調査シタルモノ
ト官フヘカラス本件ニ於テ檢事ノ陳述シ
タル第一審判決ノ犯罪行爲ハ昭和十四年
一月ヨリ同年六月二十日迄ノ間前後十二
回ナリト在リ然レニ前記引用ノ犯罪表ニ
ハ十四回ノ犯罪行爲ノ記載アリ其ノ内何
レヲ指シヤ明カナラス尙ホ右犯罪表ノ中
品名欄ヲ見ルニ第一審判決乃至原判決ニ
在ル1416葛城四十四時巾四十七ヤル物廣
巾コロール(十六番手使用)其他平織五枚
朱子等ノ品目ヲ發見セズ前記ノ問答ニ依
リテハ是等ノモノカ賣買セラレ又ハ仲介
セラレタリヤ否ヤヲ知ルニ由ナキモノナ
リ要スルニ原判決ハ犯罪事實ノ全部ニ關
シ必要ナル審理ヲ爲シタルモノト官フヘ
カラス原審ハ此點ニ於テ未ダ審理ヲ盡サ
サルモノト官フヘシ宜シク原判決並ニ原
審審理手續ヲ破毀シ更ニ適正ナル審理ヲ
命セラルヘキモノナリト信スト云フニ在
レトモ記錄ヲ查スルニ原審公判調書ニ於
テハ所論犯罪表ヲ被告人ニ示シテ訊問

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

以テ被告ノ爲シタルコトカ卸販賣業務ナリ
ト解スルハ重大ナル誤解ナリト官ハサル
ヘカラス次ニ原裁判所カ引用シタル檢事
廳取書ノ部分ヲ其儘ニ抄録スレハ次ノ如
シ「此ノ際私ノ業態ヲ申上ケマスカ取次
販賣業者ヲアツテ甲カラ綿布ヲ二十八圓
テ買ヒ夫レヲ乙ニ二十九圓テ賣リ差引一
圓口錢ヲ儲ケルノテアリマス無許可品ハ
スヘテ現金取引トナツテ其ノテ甲カラ
直接ニ乙方ヘ品物ヲ送ツテ賣ヒアルトキ
ハ私カ集金シ其ノ内カラ口錢ヲ差引イタ
モノヲ支拂フコトモアレハ都合ニヨツテ
甲カラ直接乙ニ集金シテ賣フテ其ノ内カ
ラ口錢ヲ貰ヒ受ケルコトモアリマス私カ
甲カラ買受ケテ乙ニ對スル賣主ハ私テア
ルコトハ相違アリマセン」此ノ記事ノ終
リニ於テモ私カ甲カラ買受ケテ乙ニ對スル
賣主ハ私テアルコトハ相違アリマセント
附言スルモ斯ノ如キハ一ノ法律ノ解釋ニ
シテ裁判ヲ爲スニ當ツテハ斯ノ如キ被告
ノ解釋ニ盲從スヘキニアラス事實ノ眞相
ノ何レニ在ルカハ其ノ前文ニ於テ右解釋
ノ基礎タル事實トシテ被告ノ述フル所ニ
基カサルヘカラス之ニ依レハ品物ハ之ヲ
所有シ居リタル甲ヨリ之ヲ需要スル乙ニ
直接持參スルモノニシテ其間被告ノ占有
ト爲ルコトナシ代金ハ或ル場合ニハ被告
カ集金シ其ノ内ヨリ口錢ヲ貰フコトモア
レハ又賣主タル甲カ直接需要家乙ヨリ集
金シテ其ノ内ヨリ口錢ヲ貰ヒ受ケルコト
モ在リ其ノ後ノ如キ場合ハ受ケタル場
合ナリ即チ檢事ノ聽取書自體ニ依ルモ被
告ノ行為カ卸販賣業者ノ行為ナリト解スヘ
キ趣旨ノモノニアラス原判決自體ノ引用
スルコトコトニ依ルモ亦以上ノ如シ況ンヤ

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

第一審公判調書全部ヲ讀讀スルトキハ被
告人ノ行為カ仲介業者ノ行為ナルコト實
ニ明白ナリ尙ホ原判決ニハ引用セサルモ
昭和十四年九月二十四日ノ司法警察官
國藤藏作成ノ聽取書中第九項ニ依ルモ
「取引ハ唯見本タケテアリマシテ現物ハ
取扱ハス先方同士直接取引シテ居リマス
金モ私ノ仕入先ノ賣店カラ集金シタ分
アリマス」ト記載セリ警察ニ於テハ被告
ヲ以テ賣主トシテノ罪案ヲ作成スル方針
ヲ以テ記錄ノ作成ニ從事セラレタルモノ
ナルヘキモ而モ猶ホ斯ノ如キ記事アリ以
テ本件ノ眞相ヲ窺フニ足ル要スルニ原判
決ハ被告ノ行為ノ態様ニ關スル認定ヲ誤
リタリト認メラルヘキ顯著ナル事由ヲ在
スルヲ以テ何卒原判決ヲ破毀セラレ事實
ニ匹敵スル御裁判ヲ行フコト希望ニ堪
スト云フニ在レトモ被告人カ綿布販賣業
ヲ營ミ居リタルモノニシテ判示物件ヲ判
示ノ者等ニ對シ卸販賣シタル原判示事實
ハ原判決ノ援引スル證據ニ依リテ證明
十分ニシテ尙モ自己ノ計算ニ於テ綿布ノ
賣買ヲ爲スヲ業トスルニ於テハ其ノ營業
施設ノ有無ニ拘ラス其ノ者カ綿布販賣業
ヲ營ム者ナリト謂フニ妨ナク原判決援引
ニ係ル所論第一審公判調書及檢事廳取書
各記載被告ノ供述ニ據ルニ出ツル
モノト解スヘキ原審カ之等證據ニヨリ被
告人ノ營業態様並判示販賣事實ヲ認シタ
ルハ何等失當ナシトス而シテ原判示事實
ハ記錄ヲ調査スルモ重大ナル誤認アルコ
トヲ疑フニ足ルヘキ顯著ナル事由ナク單
ニ賣買ノ仲介ヲ爲シ一定ノ口錢ヲ得ル者
ニ過キストスル事實ハ之ヲ認ムルヲ得ス
從犯ヲ以テ目スヘシトスル所論ノ失當ナ
ルコト亦明ナリト論旨理由ナシ

○被告違反ノ取引事實ノ審理方法ニ列示方

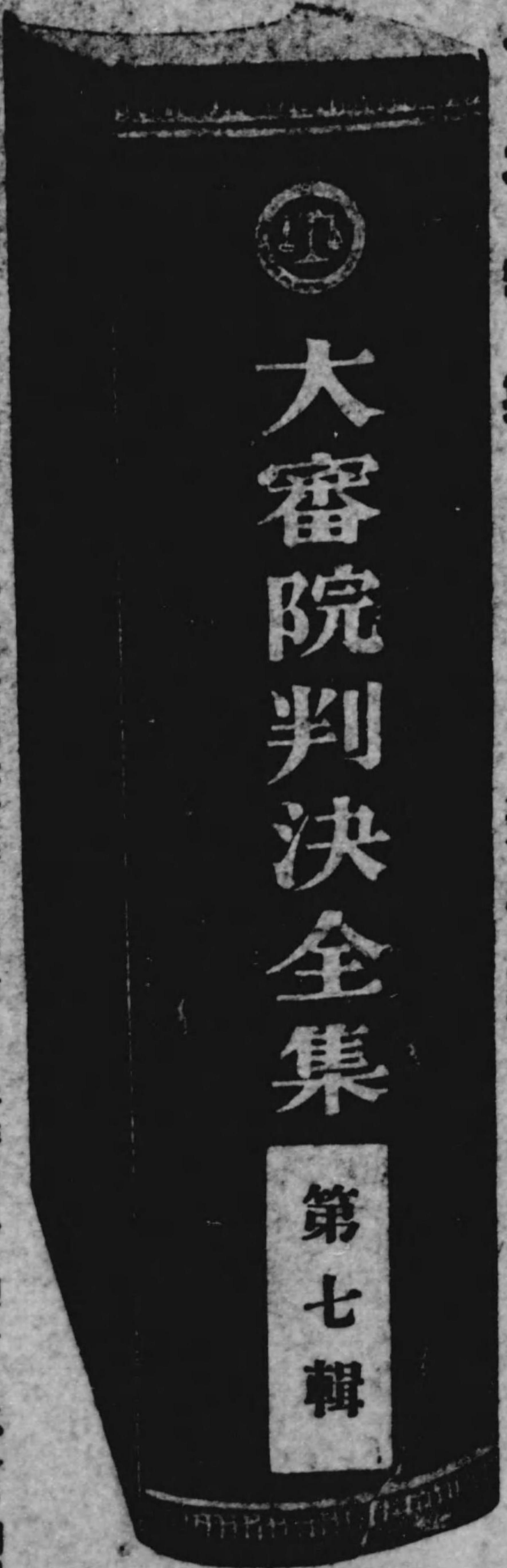
ラ爲シタル記事アレトモ原判決ハ右檢事
廳取書四項乃至十五項ハ證據ト爲ササル
カ故ニ之ヲ以テ以上ノ缺點ヲ補フニ足ラ
ス原判決ハ尙ホ此ノ外ニ檢事廳取書ノ一
部ヲ摘記スレトモ右ハ被告カ本件ノ行爲
ハヤハリ賣買行爲ナルコトヲ認メタル
趣旨ニテ引用セラレタルニ過キス葛城コ
ロ以下ノ具體的ノ賣買アリシコトヲ
證スルニ足ラス尙ホ茲ニ不可解ナルハ原
判決ハ被告カ販賣シタルモノノ一トシテ
廣巾コロール天(糸十六番手使用)十六反
コロール天ヲ販賣シタルノ記事アル事ナシ
第一、二審ヲ通シ被告ノ販賣シタルモノ
ニ付テハ之ヲコロールトナリト官ヒコロール
ナリト官ハスコロールハコロールト異リ未
タ起毛セサル織物ナルヲ以テコロール販
賣シタル供述記載ヲ以テコロール天販賣
證據ト爲スヘカラス刑事訴訟法ノ規定ハ
證據ト爲スヘカラス保障ナルヲ以テ濫リ
人權ノ爲メ重要ナル保障ナルヲ以テ濫リ
ニ之ヲ緩クスルコトキハ其ノ弊害ノ及フト
コロールヘカラス原判決ノ如キハ宜シク
之ヲ破毀セラレ法律遵守ノ司法精神ヲ確
立セラルヘキモノナリト思考スト云フニ
在レトモ原判決ノ援引シタル原審公判調
書コロール天平織五枚朱子販賣ノ事實ヲ知
ニ足リ而テ原判決示シテ證據ヲ綜合シ判
示販賣事實ヲ認定スルニ十分ナルコト既
ニ說明シタルカ如シ尙「廣巾コロール天」
ハ「廣巾コロール」トスルヲ可ナリトスヘ
キモ「コロール」ハ「コロール」ノ一種ナ
ルコト原審公判調書ニ明ナレハ之ヲ「コ
ロール」ト表示シタルハトテ必スシモ失
當ナリト爲スヘキニ非ス論旨理由ナシ
同第四點原判決ハ刑ノ量定過重ナリト認

7C-3

第七部全集判例書六 行發日五廿月二十年五十四和

一月申出見込
お申込を來見込

合本特製 (總索引附) 菊倍版 (本誌)



昭和十五年一月一日
至昭和十五年十二月二十日
三十六册合本

▲……本誌が昭和九年一月より發行せる「大審院判決全集」は非常なる好評を以て迎へられ、今や判例報導機關として最高峰たるの聲價を博するに至つた。
▲……蓋し「大審院判決全集」は其の名の示す如く、大審院判例審査會が判例として公表するものの外に苟も法令の解釋運用上に參考となるべきものを悉く輯録して之を速報するからである。即ち本全集は我が大審院全判決の縮刷版であると云ふも強ち過言でない。

- 第一、二、三、六輯は各賣切
- 第四輯 (自昭和十二年一月一日至同十二年十二月) 二十三册合本
- 第五輯 (自昭和十三年一月一日至同十二年十二月) 二十四册合本

特種金 五
送料内金 三十
定價金 五七

發行所

株式會社 法律新報社
東京市麹町區丸ノ内仲通三號館
電話丸ノ内〇七七七番



